

此廣告見御取引の方世風俗畫報廣告據御附記を乞ふ

●**寶丹**は原コレラ病の豫防藥として發賣せし良劑なるに●中暑●霍亂●痢病●吐瀉症●中毒●心腹痛其他の諸症に大効を奏し普く世人の賞用せらるゝところ今また左の如く新たなる効驗は發見せられたり



日本體育會より御信書の附言

御專賣の**寶丹**は殺菌力強く且つ細胞の活動を喚起することを確認

を以て**肺病**の豫防にも適劑なることを確

故に**寶丹**は軍隊學校集會宴席密席等は勿論家庭衛生の常備藥として缺くべからざる良劑也●各地に同名異人の守田治兵衛あるは守田堂 其他一見視誤やうき體裁にせる類似藥これあり候あいだ御購求の際東京池之端「仲町二拾七號所有地守田治兵衛」と包紙歐文の中央赤色に印刷並に銀鏡器に印刷ある商標御檢認の上何卒御愛顧奉願上候

**寶丹本舗** 東京市下谷區池之端 仲町二拾七號所有地 **守田治兵衛**

臨時 増刊 **風俗畫報**

第三百八十號

下谷區池之端 其二

明治四十五年 二月廿五日 東陽堂發行

新撰東京名所圖會 卷五十二編

目録 前編 東京名所圖會 卷五十二編 守田治兵衛

第五拾貳編 目次

○下谷區の部 其二

○記事

- 池之端七軒町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 諸寺院
- 下谷上車坂町 町名の起原並沿革
- 屏風坂下 町名の起原並沿革
- 下谷區役所 岩倉職道學校
- 下谷下車坂町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 町況
- 私立天海小學校
- 下谷萬年町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 町況
- 萬年小學校
- 下谷山伏町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 水多屋敷
- 聖開寺
- 私立山伏町小學校
- 下谷新坂本町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革

- 下谷龜住町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 養王院
- 下谷人谷町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 小野照神社
- 小野照神社 孤火神社
- 諸寺院 入谷牛花
- 入谷千尋 私立入谷小學校
- 下谷龜泉寺町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 大音寺前
- 千手稲前神社 熊手の細工
- 正徳寺の紅蓮 市立東盛小學校
- 金屋商
- 下谷坂本町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 私立濱邊小學校
- 景況 金杉の名稱
- 下谷金杉上町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 三善神社
- 了源院 萬徳寺
- 下谷金杉下町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 霧永寺
- 文化交政年間金杉居住の文士

- 下谷三之輪町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 養王寺
- 永久寺 梅林寺
- 日本堤
- 下谷龜崎町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革
- 下谷坂本町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 札の辻 ヲツオヤ場
- 下谷上根岸町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 今昔の景況
- 臺の下
- 御徳神社 三島神社
- 養徳寺 梅屋敷
- 下谷中根岸町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 景況
- 時雨の岡 柳井の松
- 石神井川用水 根岸養生院
- 永福寺 千手稲
- 西光寺 不動堂
- 西金助寺 安樂寺

- 下谷下根岸町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 石神井神社
- 大空院 御徳堂
- 面華堂の跡 根岸及龜崎の地
- 根岸はくしりの名所 根岸の名物
- 文政年間根岸に居住せる著名の人 古の奥州街道
- 上町町 位置及地勢
- 町名の起原並沿革 里谷の景況
- 一徳院 徳大寺
- 口書
- 小野前神社
- 挿書
- 根岸御行の松
- 人住庚申傳の「小野照神計」○金
- 彩安樂寺○根岸町○正徳寺の丹楓
- 江戸の名所圖會前編

- 寄席
- 下谷區役所 高年小學校
- 谷鬼子神社 入谷小學校
- 小野照神社 入谷小學校
- 坂本通 三善神社
- 金杉町 三善神社
- 手稲の松 御徳堂
- 御行の松 御徳堂
- 三島神社
- 養徳寺
- 梅屋敷
- 石神井川用水
- 根岸養生院
- 永福寺
- 千手稲
- 西光寺
- 不動堂
- 西金助寺
- 安樂寺



○下谷區の部 其二

●池之端七軒町

○位置及地勢

池之端七軒町、東は小渠を隔て、上野花園町に隣り、南は下谷茅町二丁目と連なり、本郷區本郷元富士町に接し、西は本郷向ヶ岡彌生町に、北は根津宮永町に接壤せり、地勢西に向ヶ岡の丘陵を負ひ、東は不忍池馬見所跡に臨み、北の方根津の低地に續く、番地の區劃、一より七十一に至る。

○町名の起原並沿革

池之端七軒町は、初め幕府の仲間組が受領地なりしに、後町民七人の購置所となり、遂に此稱あり。

府内備考に云、町名起立の儀は、古來大猷院様御代より畔柳助九郎様、牧野金助様御組御中間衆の御拜領地に御座候處、右拜領地の内を年代不知武家方寺方並其節の町人七人にて買求候に付、則ち七軒町と名付候由に御座候、夫故右七人の者草分にて名前左の通に御座候。

權兵衛、三郎兵衛、久兵衛、勘右衛門、市右衛門、與兵衛、惣兵衛

右の通七人にて所持致罷在候處、其後追々六人は相替り右の内市右衛門儀、其節名主役相勤罷在、當名主仁右衛門まで五代役義相續仕候、尤右の内間口廣く所持致候者は追々五間七間宛分け賣渡候間、當時地主人数十五人に相成申候。明治二年八月七軒横町、永昌院、淨圓寺、覺性寺、東淵寺、正慶寺の門前及寺地を合し、五年又舊喜連川舊足利氏邸並に舊富山藩前田氏別邸、舊大聖寺藩前田氏別邸を合併せり。

○秋葉横町

里俗北側の横丁を秋葉横町と呼ぶ。

府内備考に云、七軒町の内、東側中程より池の端へ曲り候横町の儀を秋葉横町と里俗に唱候儀は、右横町右側に慶安寺と申禪宗寺有之、右境内に秋葉社有之候、右故唱來候儀に御座候。

○景況

當町は邸宅市廛相半ばせり、三十八番地に建築受負業川端文次郎(電下一、一八三番)、同業木下米三郎(電下一、九八四番)あり又寺院多し、心行寺(三番地)、宗賢寺(八番地)、覺性寺(十二番地)、大正寺(十四番地)、慶安寺(二十三番地)、根生院(二十八番地)、東淵寺(四十番地)、正慶寺(四十五番地)、妙顯寺(四十九番地)、忠綱寺(五十六番地)、休昌院(六十二番地)、妙極寺(七十番地)以上十二箇寺院とす。

●諸寺院

○心行寺 二番地にあり。  
○宗賢寺 八番地にあり、日蓮宗甲斐國身延山久遠寺末元和五年の創建なり、開山は僧日受、毘沙門堂あり。  
○覺性寺 十二番地。

○大正寺 十四番地にあり、日蓮宗京都妙覺寺の末なり、慶長の頃、僧日亮二菴を此地に建て、大正菴と號し、元和二年之を寺宇とす、即ち日亮の開基なり。  
△川路聖謨の墓 寺内にあり、左衛門尉聖謨は幕吏なり、才幹を以て稱せらる、明治元年卒す。

○慶安寺 二十三番地にあり、月高山と號す、曹洞宗淺草清島町白泉寺の末にして、寛永四年の創建なり、開基は僧楚郭、開山は僧全得。

△前野良澤の墓 名は達、字は士章、良澤を通稱とす、享和二年歿す、我邦蘭學者の祖なり。

○根生院 二十八番地、金剛山延壽院と號す、元と本郷區湯島藤原院の東隣(區之部其一参照)にありしが、明治二十二年池之端七軒町即ち方今の地へ移り、後又退轉せり、其跡は昨四十年東京勸業博覽會開設の際、空中觀覽車の敷地となれり、當院は眞言新義派四箇寺の一にして、本尊藥師如來は佛工春日の作といへり、昔は寺領二百石ありしなり。

○東瀨寺 四十番地にあり、潜龍山と號す、臨濟宗京都妙心寺の末にして、寛永元年の創立なり、僧快然を開山とし、松平(本姓)大河内伊勢守三綱を開基とす。

○正慶寺 四十五番地にあり、亦臨濟宗とす、寛永七年の建立に係り、初め法林寺と稱し、元祿の頃今の號に改む、開山は僧湛水なり。

△北村季吟の墓 季吟は拾穂軒と號す(第四十七編小石川)近江の人なり、松永貞徳の門に入りて國學に長ず、元は玉津島の社司にて初の名は信澄、後ち呂菴と號す、幕府に徵されて和歌所に補せられ、再昌院法印に任じ、祿五百石を賜ふ、著す所の書八代集抄、萬葉穗抄、源氏湖月抄、朗詠集註等あり、寛永二年六月十五日没す、年八十八、墓は二段の石にて「再昌院法印季吟先生」と刻せり。

○妙顯寺 四十九番地。  
○忠綱寺 五十六番地にあり、眞宗大谷派にして寛永元年渡邊忠七郎忠綱の建る所なり、即ち其姓名を寺號とし向岡山渡邊院忠綱寺と稱す、初め神田駿河臺にあり、同六年火あり災後此地に移る。  
○休昌院 六十二番地。

一、二六五番、守田重兵衛)は老舖なり、其小路を里俗櫻香横町と呼ぶ。

●下谷區役所

下谷區役所は上車坂町(自三十九番地)にあり、當區役所は明治十一年十一月上野公園地下寺町通修禪院内に開廳す、二十年八月同公園内不忍池生池院に移り、十四年南稻荷町八十一番地成就院、十五年十二月上野山下町三番地、十八年五月北稻荷町三十四番地、十九年四月下谷仲徒町五十四番地、三十七年三月下谷北稻荷町六番地宗源寺等移轉の後、六萬九千餘圓の豫算を以て昨秋來今の上車坂町に新築工事を起し、本年愈々竣工したれば一月十二日之が落成式を舉行し、即日開廳せり。

宮本 經吉 堀田 正養 森 長義 岡本 益道  
辻 吉亨 澤 簡徳(兼) 北原 雅長 杉本嘉兵衛(兼)  
眞田 一郎 山田 敬正  
山田氏目下奉職中なり。

●岩倉鐵道學校

岩倉鐵道學校、上車坂町(自五十七番地)にあり、明治三十年の創立にして、工學士笠井愛次郎等資を投じ、神田區錦町神田中學校の一部を借りて開校せり、三十三年上野公園元學習院分院跡に移轉し、鐵道に關する諸會社其他の有志者より基本金の寄附を募り、校の基礎を鞏固にし、三十四年方今の地乃ち舊日本鐵道會社地所の一部を借り、新に校舍を建築して之に移轉し、三十六年社團法人の認可を得、將來永く公認岩倉具定及び其繼承者を本校の總長に推戴することとし、校名を岩倉鐵道學校と改稱す、三十七年實業學校令に依り、學則を改正せり、四十年三月火あり、全部燒失す、因て假に神田區三崎町一丁目大成中學校内に

●妙極寺 七十番地。

●下谷上車坂町

○位置及地勢 下谷上車坂町、南は電車の通街を隔て、下谷車坂町に面し、西は山下町に、東は下谷北稻荷町に隣り、其二隅淺草區神吉町の一部、茲に挿入し、北は下車坂町に連なれり、地勢平坦なりとす、番地の區劃、一より六十八に至る。

○町名の起原並沿革 下谷上車坂町並に下車坂町は、往時下谷村の内なり、車坂町と云へる町家はもと上野山内車坂下、屏風坂下俚俗下寺と唱ふる所にて一丁目より三丁目までありしを、元祿十一年に及びて其西側用地となり、下谷長者町にて代地を給す、後ち東叡山中堂建立に付車坂町一圓山内に圍込み寺院を建て替地を下谷の内及神田西久保等にて與ふ、上下車坂とも其内の二箇所にて上車坂町は寺町通車坂町、下車坂町は屏風坂下車坂町と唱へて區別せるを明治二年之を合せ、同五年又分ちて二町とし、冠するに上下の字を以てす、當時正法院門前、高岩院門前、舊徒士屋敷及附近の土地寺地を上車坂町に合併したり。

○屏風坂下 上車坂町と上野公園地との間を里俗屏風坂下と呼ぶ、山下町の鐵道踏切を越えて、上野に登る處、坂あり、是れ屏風坂。

○景況 町内大率市廛なり、西南の一角に東京市下谷區役所、又北に方りて岩倉鐵道學校あり、旅館に下總屋(一番地、佐藤勝三郎)、那須館(十四番地、電下九二九番、管内國三郎)、醫師に井上甲子助(六十三番地、電本三〇五番)、高橋眞雄(六十五番地)、藥劑師に安達耐藏(四十八番地)あり、小間物商櫻香(二十五番地、電下

に教授し、今や上車坂町の舊地に校舍新築工事中なり、本校は其名の示すが如く、鐵道事業に従事すべき職員を養成する處にして、學科に甲部、乙部を置き、之を分ちて建設科、機械科、業務科の三學科とし、生徒をして各其一を選びて之を專修せしむ、修業年限は甲部三箇年六箇月、乙部二箇年六箇月にして、高等小學卒業の者は學術試験を要せず、甲部乙部第一學年に入學することを得、現在の生徒數八百四十九人にして、創立以來の卒業生九百八十二人なり。

●櫻香 小間物化粧品老舖櫻香(守田重兵衛電下一、二六五番)は上車坂町二十五番地にあり、櫻香は梳油の名なり、品質精良芳香宜しきを得、炎暑の候と雖も腐敗の憂なきを以て、其名江戸に著はれ、兒童走卒も之を知らざるなく、遂に本店の通稱となれり、櫻香の名は獨り江戸時代に聞えたるのみならず、第一回より第四回に至る内國勸業博覽會に於て毎回有功賞牌を得たり、又當店は素馨香、白鵝微香、壽美麗香、ワニヲ香以上四種の發賣元なり。

●下谷下車坂町

○位置及地勢 下谷下車坂町、南は上車坂町に連なり、東は萬年助一丁目に接續し、西は上野山下町に面し、北の方鋭角を成し、山下町に沿ふて電車々庫への通路を走り、其西豊住町と境界を交へたり、地勢平夷なりとす、番地の區劃、一より四十四に至る。

○町名の起原並沿革 上車坂町の條に詳かなり、明治二年具足町及下谷町一丁目代地を、五年四月更に近傍の寺地を合併せり。

●景況

○景況 町内大率市廛なり、西南の一角に東京市下谷區役所、又北に方りて岩倉鐵道學校あり、旅館に下總屋(一番地、佐藤勝三郎)、那須館(十四番地、電下九二九番、管内國三郎)、醫師に井上甲子助(六十三番地、電本三〇五番)、高橋眞雄(六十五番地)、藥劑師に安達耐藏(四十八番地)あり、小間物商櫻香(二十五番地、電下

大率市塵なり、一番地に紙パイ製造業松島惣兵衛(電下二、二七二番)、十三番地に東京製鋼合資會社、十八番地に下車坂町郵便局、三十九番地に正法寺、四十三番地に林光寺等あり。

### 私立天海高等小學校

私立天海小學校は、下谷下車坂町(自二十八番地)にあり、明治六年三月の設立にして、校地九十坪、校舎九十七坪、教室八十二坪、講義場六十二坪あり、學級數は尋常二學級、高等一學級に過ぎず、教員五名、兒童數男女百七十七名、設立者阪本徳五郎。

### 下谷萬年町

○位置及地勢  
下谷萬年町、二丁目あり。

一丁目、西は下車坂町に接し、南と東は淺草區神吉町に包まれ北は萬年町二丁目に連なる。

二丁目は二丁目の北にあり、西は下谷豐住町、東は下谷山伏町、新坂本町、北は入谷町に接せり、地勢一丁目、二丁目を通じて沮洳低濕、入谷町に同じ、番地の區劃左の如し。

一丁目 至一番地至四十七番地  
二丁目 至一番地至六十七番地

### 町名の起原沿革

下谷萬年町、元和元年黒繼組五十人の大繼地となり、元禄十一年十月其内を用地とし、代地を外に給す、翌年官に請ふて町屋敷とし、山崎町と唱へ、分ちて二町となし、明治二年祝して今の稱に改む。

### 景況

一丁目の邊には多少の町家あり、町内概して貧民の巢窟なり、寺院あり、長光寺といひ大聖院といふ。

### 寺院

○長光寺 萬年町二丁目六十六番地にあり、湯島山と號す、淨土宗京都知恩院の末寺にして、開山僧長光(天正二) 初め湯島天神通に創建し萬治二年此地に移る。

○大聖院 同六十七番地にあり、眞言宗大本山御室仁和寺教會取締事務所と札す、住職中田慧雄、不動堂、辨財天、堂前に池あり。

### 貧民窟

下谷萬年町及同山伏町の邊は、市内に於ける有名なる貧民窟にして芝の新網、四谷の鮫ヶ橋と併せ稱せらる、左に其模様を記す。

○住居 彼等の住居は、一種の陋屋を七八戸より乃至十數戸に仕切りたる所謂九尺二間の棟割長屋にして、或は壁の落ちたるあり、或は闕の朽ちて戸締りの成らざるあり、中には屋根破れて雨露を凌ぐに堪えざるを思ふもの莫きにあらざる、敷物といへば疊の床の出でたるもの、又は薄緑の黒く汚れて所々に穴の明きたるものを漸く二枚三枚布き並べたるのみにて、籠の有るもあれば無きもあり、火鉢などを置ける家は指を屈する程の敷に過ぎず、加ふるに大抵毎戸に二三人の同居者あるを以て普通とすれば、其狀宛然豚小屋に似たり。

○衣服 住居の有様既に前項の如し、衣服の醜陋固より云ふまでもあらず、殊に暑中に在ては男子は褌鼻繩の外一物も身に付けず、女子は垢染たる腰巻にチヤンノを纏ふ位が關の山にて、洋畫家の稱して以て美の極とする裸體と相距る遠からざるの態裁なり。

○食物 十數の棟を並べたる長屋中に在て、日々米を買て自ら炊くものは殆ど十分の三に過ぎず、其七分は界隈なる各工場等より貰ひ來れる殘飯を購ふて間に合すなり(同所には僅て各工場へ持運すて更に長屋中へ搬入すを業と爲す)其價は時に依りて多少の高下あり。

れど、普通の味噌汁一杯一錢五厘より二錢位迄とす、去れど雨天其他の事故にて三文の稼ぎもなき時は、此殘飯すら購ふ能はずして、空腹の儘一日乃至二日間も我慢するもの性々あり、其代りに偶々三四十錢も手に入る時は、忽ち酒肴肴と贅澤を極め、一度に之を遣ひ果して、又一錢も剩さざるを常例とす、概して彼等一人一日の生活費は五六錢を出でざるものと知るべし。

○職業 彼等の職業は一定せずと雖も、要するに資本の入りざる業を擇ぶが故、紙屑拾其大部分を占むるが如く、人力車軌下駄の齒入、六部、門附等は先づ上等の部類にして、團扇編、燐寸の箱張、紙屑撰等を其重なるものとす。

○家賃 一日一錢五厘より二錢までにて、日々家主より取立るの定めなるが、去りて雨天打續きたる時などは、到底取立やうもなく、止むを得ず其儘に爲し置きて、更に稼ぎのありしと思ふ日を擇むで取立に行くなり、然れども其間既に日々の家賃積り居る事として、固より奇麗に勘定の出來やう等もなく、兎角家賃は滞り勝なりとぞ。

○長屋中の親睦 長屋中は意外にも親睦なるものにて、隣佑相扶け同情相憐むこと殆ど骨肉も音ならず、食用品の貸借などは朝夕敢て珍らしとせず、其代りに貸借品を返せ返さぬの一件より喧嘩口論を爲すことも亦頻繁にて、如何なる目と雖も二組三組の喧嘩のなきは殆ど稀なり、去れど之が爲め長屋中の親睦を害するが如きは毛頭なく、朝に花の喧嘩を爲して、夕に談笑するの美風は實に此窟の特有とも云ふべく、普通一般の社交には到底望むべからざるの習俗たり、畢竟するに彼等は鄰佑相頼らず孤立して生活を營む能はざるの弱點を有するより、所謂春に腹は換られぬ必要に迫られて、斯くは無邪氣なるものか。

○兒童の有様 貧乏人の兒澤山と云ふ譬へに漏れず、此窟に

は男女の兒童割合に多きが如く、随つて學齡に達せしものも亦少からざるなり、此等の兒童常に何事を爲すやと云ふに、三五相携へては寺院に遊び、一二組を成しては土溝を漁る、一見無意味の遊戯に過ぎるが如しと雖も、實は大に意味あることにて其寺院に遊ぶは雜儀其の他の佛事に際會して施與の惠に浴せんが爲めに、其土溝を漁るは、萬一の遺棄物を僥倖せんが爲めに外ならず、而して偶々獲る所あれば、直ちに之を食物に替へて口腹を肥すなり、斯の如き家庭に成長するの彼等、豈に眞人間たるを望むべけんや、結局監獄の厄介と爲らざるもの十の二三のみ、此窟に於ける兒童の境遇亦憫む可らずとせんや。

### 萬年尋常小學校

萬年尋常小學校は、萬年町二丁目に在り、明治三十六年の創立にして、東京市建設の特殊學校なりとす、貧困者の兒童を收容し、一切の修學用品より手巾、上草履、雨傘等まで給與若くは貸與し、無報酬を以て尋常科の科目を教授す、學校の設備としては兒童の爲めに浴室を設け、理髪を行ひ、疾患あるものは校醫に託して治療せしむ、元と二部教授の編制なりしが三十七年に至り書問課學能はざる兒童の爲め更に夜學部を開始し、都合三部に分ちて就學上の利便を計れり、現在の生徒數は晝間部三百三十八人、夜間部五十四人、開校以來の卒業生五十三人なり。

### 下谷山伏町

○位置及地勢  
下谷山伏町、北は下谷新坂本町に面し、西は新坂本町と萬年町二丁目に接し、東は入谷町に、南は淺草區北清島町及び松葉町に隣なる低地なり、番地の區劃一より七十一に至る。

### 町名の起原沿革

五

下谷山伏町、元と本多喜十郎の邸地なりしに上地して、享保八年幕士村井彌左衛門等之に移り、牛込山伏町代地下谷山伏町と云へり、明治二年六月省略して今の名とし、五年四月近傍の土地を合併す。

◎本多屋敷

本町の西方、俚俗本多屋敷と呼ぶ。

◎景況

萬年町に接し、町内概して細民富なり、南の方北清島町に面する處町屋にして巡查派出所(十七番地)あり、五番地に株式會社萬銀行(資本金十五萬圓(電話下谷)二、二六〇番)八番地に白米商山口吉太郎(電話下谷)等あり、醫師に望月岩松(二十三番地)上原宇佐太郎(二三二番)又寺院あり、燈明寺(二番地)といふ。

◎燈明寺

燈明寺、下谷山伏町二番地にあり、赤城山圓應院と號す、天台宗延曆寺の末寺なり、初め神田駿河臺に在り、明曆三年今の地に移る、開山は僧祐般(電話下谷)にして、阿彌陀佛を本尊とす。門前に信州善光寺常燈明、寶曆五年乙亥九月云々の標石あり。

新編江戶志(二)に云、赤城山燈明寺、天台上野末、寺傳云、信州善光寺の燈明當寺にあり、是を受繼ぐの當寺より附屬すとなり。

本尊釋迦如來 赤城明神社

と、本堂の扁額「善光寺如來」とありて、燈明徹かに堂奥を照らし。

●私立山伏町尋常小學校

私立山伏町小學校は、下谷山伏町十九番地にあり、明治三十二年

九月の設立にして校地二百六十九坪、校舍三十八坪、教室十四坪、體操場二百三十一坪あり、學級數二、教員一名、兒童數男

◎下谷新坂本町

下谷新坂本町、南は下谷山伏町に面し、西北東の三面は下谷入

◎位置及地勢

谷町に裏まる、地形稍々正方に類すれど、西南に、山伏町と萬年町二丁目の間に介在せる別當の附屬地あり、地勢一般に低下

◎町名の起原沿革

往時坂本村の地にして、市街に列すること坂本町に後れたり、仍て新の字を加へて之を別つ。

◎下谷豐住町

◎位置及地勢

下谷豐住町、南は下車坂町及び上野山下町に隣り、東は萬年町二丁目、西は坂本町一丁目に接し、北は入谷町に裏まる、地勢低下、番地は一より六十に至る。

◎町名の起原沿革

下谷豐住町、往時は萬年町と共に與濕の地なり、寛永元年切手同心等の大細地となり、元祿十二年官に請ふて町屋敷となし、下谷御切手町と唱ふ、明治元年十一月御の字を省き、同二年五月土地の繁榮を祝して更に今の稱に改む。

◎景況

町家なり、坂本入口の裏通りにて、北は入谷の寺院に連なり、東は萬年町の貧民窟に隣る、南の方東京鐵道會社の車庫に面する所、寺あり養玉院(五十九番地)といふ。

◎養玉院

養玉院は下谷豐住町五十九番地にあり、金光山大覺寺と號す、天台宗近江延曆寺の末派にして、創建の年代諸書異同あり。

新編江戶志(二)に云、金光山大覺寺養玉院、天台上野末、坂本、南向茶話に事のついでといふ書を引て曰、此寺は元は大

手の向に在、三觀院と云、寛永年中養玉院と改む。江戶砂子書入に云、金光山養玉院、始三觀院と號、天海僧正

未東叡山不開、大手前寺(清井井樂)に寺玉し時の檀那を東叡山起立の時、悉慕迄三觀院に讓渡す、四民ともに今も銀一兩本坊

に奉り非時を給云々、後養玉院と改號す。埋木花(六)に云、養玉院は元上野山内の寺院也(明の門といふ)

當時新門外坂本より)自火にて御靈屋向御燒失の事によつて構外坂本に引移さむと云。

江戶名所圖會(十七)に云、金光山養玉院、下谷坂本一丁目の南にあり、天台宗にして往昔は今の御城内大手の邊りにあり

しと、慶長の頃今の地に遷させらる、往昔は三觀院と號せるを寛永年間今の名に改るといへり。東京案内(編東京)に云、寛永十二年屏風坂下に創建し、三明院

と云ひ、元祿十一年今の地に移り、宗對馬守義成女養玉院の法號を取りて今の名に改む、開山は僧及意。△涅槃畫像 當寺の什物に釋迦如來涅槃畫像あり。新編江戶志に云、二月八日涅槃像を見ず、大幅にて南光坊の

江戶名所圖會に云、當寺に釋迦の涅槃像の畫幅一幅を藏す、上に慈眼大師の讚あり、三國傳燈大僧正天海書としるせり、

毎年二月十五日是を拜さしむ。東都歲事記二月十五日の條に、下谷養玉院、坂本にあり、今日掛るところの什物涅槃像は、長谷川等雲の筆にして、慈眼

大師の御讚あり。△高尾の碁、將碁盤 亦當寺の什寶として傳ふ。

埋木花に云、高尾歿後三浦屋は當院の檀家ゆゑ此品を納めりといふ、碁盤四方黒呂色金蒔繪、桐に鳳凰小松紋所丸に鈎酸

漿、碁筒も盤と同じもやうなり、内は金梨地、將碁盤同るい

る紅葉流し、立田川のもやう、紋所同じかたちにして丸なしの鈎かたばみなり、駒箱は見えず、何れも木櫃の様に見ゆ、

古物ともなり。又天海僧正以來の舊例にして、新吉原古代よりの遊女屋三浦

屋、扇屋の類七八家、毎年正月二十八日御門主へ御目見(日光御登山歸)是は當時の新吉原へ引移の前後、何やらん御世

話とも有之事の御禮に出し舊例とかや、今は三浦屋某といふは廊中名主代とやらんを勤め、裏住居して有か無かの體とぞ

然れども御目見の時上席をゆるされて出る例とぞ。又云當時は、養玉院三浦屋の檀寺にあらず。△名家の墓 寺内に西山順泰、諸葛琴臺、佐久間熊水の墓あり。

◎下谷入谷町

◎位置及地勢

下谷入谷町、西は坂本町二丁目、同三丁目、同四丁目及び金杉上町に接し、北は金杉上町と下谷龍泉寺町に隣り、東は淺草區新谷町及光月町に接し、南は淺草松葉町、下谷新坂本町、萬年

町二丁目、下谷野住町と其境界を交へたり、町域極めて廣く、其地勢一般に低下せり、番地を區劃して一番地より四百十二番地とし、其内第三百三十八番地と第四百四十一番地を缺く。

○町名の起原並沿革

元と坂本村の内なり、坂本町の條に詳記す、明治二十四年立て、一町となせり。

○景況

町内廣く、番地甚だ入組めり、寺院、植木職多く、近年また工場敷地として使用せらる、邸宅あり、市廛あり、行潦の溜留せるあり、所々空地ありて長屋を新築するもの類々、華族に子爵京極高德(百四十二番地)、子爵野宮定毅(百十六番地)、國學木村正辭(三十五番地)、畫家に玉置環齋(五十四番地)、高森碎巖(百十七番地)、醫師に大坪銀次郎(六十九番地)、あり、印刷業大久保豊太郎(二二四七番)、貿易毛革商近江屋山田周吉(三十九番)、農笠原恵(百三十四番)、牛乳搾取業山岸茂八(百十七番)、牛馬肉商小林祐次郎(二百一十一番)、東京莫大小製造會社、同盟舎第二工場(硝子製造)東京莫大小製造會社工場、製紐株式會社第二工場等の外、寺院に靜遠院良感寺、眞源寺、長松寺、法清寺、最上寺、東運寺、英信寺、泰壽院、宗慶寺、法昌寺、正洞院、感應寺、嶺照院、隨德寺、全得寺、正覺寺以上十七院あり。

○小野照崎神社

小野照崎神社は、下谷入谷町九十八番地に鎮座す、創建年月詳かならず、小野篁を祀り、舊坂本村の鎮守なり、明治五年村社に列す、社掌小野亮道。

○境内の現況

坂本町四丁目の南側なり、通街市廛の間、敷

石あり、以て社頭の石橋に達す、橋に勾欄あり、左右に石の玉垣を設け、花崗石の鳥居一基、交政六年癸未正月新青原江戸街三丁目佐野氏野屋敷に末社織姫神社、水盤、琴平神社、左鳥居際に懸茶屋一軒、傍に稻荷社あり、正面は神社拜殿にして、西北に向ふ、瓦葺破風造向拜勾欄付上々、慈唐戸龍唐獅子の彫、「小野照崎神社」と扁す、廣前に狛犬一對(昭和)、幟竿石(明治三)、鐵箱(正月建明治七年戊辰)の紋章を鑄る、拜殿の左に富士淺間勸請、庭あり、池あり、岩石を疊みて富士の山容を模せり、垣を造り門を設けて入りしめす、拜殿の右に社務所あり、之と對して神樂殿、末社御嶽神社、神輿庫相並ぶ、其傍に御供水あり、是より裏門にて又石の鳥居(再建明治三)あり、石垣を築きて松を植ゑ、境内禁止條々の制札を建てたり。

○境内の舊況

社頭西に面す、中門あり、石鳥居一基(高一丈一尺、廣一丈一尺、鳥居前に、石燈籠一對、左に神樂具置場(開口六間、右に神樂殿(開口二間、供所(開口三間、正面敷石一條、拜殿に通ず、左側に石水盤、左右に狛犬及鐵笠各一對を置く、拜殿(開口四間、幣殿(開口二間、本殿(開口二間、其右に庚申供養塔十二基と額堂跡(開口三間、拜殿の左に地主稻荷社(開口三間、其右に門額(開口二間、東邊太子立像(太子安寶孫辨天合殿東北の一隅に揚弓場址(開口七間、東南隅に御供水あり、拜殿より折廻して、南に敷石あり、裏門に通ず、門内石鳥居(高七尺、手水鉢あり、境内除地三百二十坪、門前町屋坂本四丁目の内百二十坪、除地供面五反二畝二十歩。

○祭神

小野篁、東帶座像丈八寸七分。

○由緒

詳らかならず、舊別當嶺松院記する所、略縁起左の如し。

略縁起

抑武藏州豊島郡坂本小野照崎大明神は、參議篁卿の眞靈を勸





請する處なり、往昔慈覺大師求法のため下野國大慈寺より京都に赴たまふとて千住の驛に止宿す、其夜奇瑞ありて御丈一寸三分の藥師如來を彫刻し、此忍ヶ岡に安置せんと欲す、幸に柴の菴有り禪定坊といふ、大師不斜悦給ひ、此山弘法弘通の靈地なり、此尊像を安置せよとて彼藥師如來を附屬し給ふ、其比篁卿は下野州の任にあたりて此忍ヶ岡に現願寺の北なり旅館を設けて遊獵の地とす、故に人呼て上野殿屋形とも此地なり申侍りぬ、彼卿任終て歸洛に及時、此景地をふかく惜み給ひ、老農に語て云、我朝觀の暇あらば又來るべし、此臨館をかふるべからずとて則禪定坊に命じて留務せしむ、然あるに仁壽二年二月篁卿逝去し給ひぬ、其夜にあたりて上野殿の假館鳴動する事夥しく、光輝山中に赫奕たり、耆老是を見て火災なりとす、暫時にして止ぬ、時に禪定坊を見らく、我在世に來らん事を先に約すといへども、はからず身まかりぬ、故に我靈を此地に止むべしと見て驚愕ぬ、程なく御入逝し給ふ事を京師よりつとが、依て小野照大明神と崇め奉り、彼假館を以て神殿とし、則禪定坊を別當とす、中頃回國の山臥快然と云も此神前に通夜せしに、いたく悟る事あり、然あるに夢幻ともなく衣冠正しき人瑞瑞の壺より藥一粒を出してこれをあたへ、衆病悉除身心安樂を唱へ給ふと覺えて忽に心身冷しく成りぬ、快然奇異のおもひをなして禪定坊に告、則云く神靈世に在せしとき傳へ給ふ名法ありと、これより是を夢想丸と名付、又衆病悉除の文によりて本地藥師如來なる事を知り、大師彫刻の尊像を以て本地佛とす、快然是より此處に止て明神へ給仕し奉る後には是を尊像と云後前令願入谷村に有り尊像といふ夫より後社頭破壞に及しに江戸の太郎重長といへる人武運を祈りしに、靈驗空しからず、二たび領主と成る、則建久年中社頭を造營し定朝の彫刻

せし護持の藥師如來を寄附す、爾來星霜推移し寛永年中東叡山開關の時、慈眼大師此忍ヶ岡を下して弘法の靈場と定給ふことく明神を坂本入谷村長左衛門稻荷の地へ移し奉る此時延明三社有、熊野は善養寺境内に安置す稻荷は坂本新門の内に有る祭所とす此長左衛門稻荷は元和の頃、耕夫長左衛門と云ものに托していはく、我は明神の末社なり、此處に鎮座すべしと、夫より長左衛門いよく尊崇す、誠に明神を遷座なすべき先非となれり、則同年九月十九日遷宮あり、其夜別當慶賢通夜す時に神靈白蛇と現じて社頭へ移り給ふを見しとかや、是より九月十九日を祭祀と定る事、遷宮の日を以て權輿とす、又老農の内市十郎と云者蟲齒を惱こと有、則いり豆を備へて祈念せしに忽に快癒しぬ、是より以來すべて口中の病を患る者、いり豆を捧て祈願するに、靈驗を蒙る事幾許といふ事をしらす、然あれば本地は醫王善神にして衆病悉除の靈藥を施し、迹は和漢の文教を都鄙に輝し、靈を武陽に止て巨益を不朽に發し給ふ、和光同塵の恵み深重なること誰か尊崇せざらんや。

別當 嶺 照 院

右は別當の縁起なるが、尙諸書異説あり。  
江戸砂子二二に云、小野照崎大明神、天台、別當小野山嶺松院、上野末、坂本、小野參議置の靈社なり、坂本總鎮守、祭禮九月十九日、篁配所より歸洛の日をもつて祭日とすといへり、篁は破軍星の精なりと、二代實録、小野篁者弘仁年中任、到參議、博學洽聞、兼詠和歌、下略又篁は不測の人なり、その身朝廷にありて瑛王宮に神遊すとたり、洛外の六道の辻は篁冥途に行通し所なり、今に至り毎年七月十日衆民此處にて聖靈のひかひ鐘とてつくなり、此所の閻魔王は篁の作なり△京紫野白臺院の側面に小野篁の墓あり△上州足利の學校は

篁の開基なり、聖堂の東の小房に篁の像あり△當社は上州より歸洛の時、武藏國忍ヶ岡にしばらく遊望の舎地諫諍亭の舊跡なり、篁をまつりて小野の宮と稱す、そのち建久三年江戸太郎重長再興といへり、寛永年中に東叡山草創の時、下谷の岡且壽庵の地にうつさる、此地に稻荷の社あり、これは元和の頃ひとつの白狐土民の長左衛門といふ者に託して小祠を立てる所の新地なり、小野の宮の祠者なりと云、今に長左衛門稻荷ともよびて當社の地主なり、此稻荷靈驗ふかく祠者の白狐夜ごと尾のさきの照て台嶺の松にかよやけり、よつて小野大明神に混じて小野照崎と神號し、且壽庵を嶺松院と改東叡山に屬す。

事蹟合考に云、元來今の上野東漸院のかけ所小野照崎といひし、古代何れの頃か此地に小野篁の靈を祭りて社を建、小野照崎大明神と稱して鎮座なり、此邊の岡廣く東南入谷村の田畑なるゆゑ、此社即入谷村の鎮座なり、寛永寺御建立ありし頃入谷村の往還筋の所へ此社を遷す、今の地是なり。江戸惣鹿子名所大全に、云、當社は忍ヶ岡に聖堂ありし頃、側に在し宮なり、聖堂今の昌平坂へ移されし時此處へ遷座ありき、此地は元且壽庵とて稻荷を祭りし地なり、今もその稻荷を地主神とす、篁は博學の人にて、あつく儒教を信じ野州の足利學校を開基し給ひし故、彼地聖堂の東に篁の神像を安置して祭祀を執行す、忍ヶ岡に學校を建られし時も、此側にて篁の祠設けられしなるべし、祭日九月十九日は配所より歸洛の日にあたり、此故に祝するなるべし、但照崎と云事は此地の舊き名が、何なる故に云にや、尙尋ぬべく、類書に地主稻荷の使者白狐の尾の照しといふ説、餘りに牽合附會と云べし、信じがたし。

新編江戸志(三)は前記の縁起を駁して、文徳實錄曰仁壽二年十二月癸未參議左辨從三位小野朝臣篁時年五十一、篁身長六尺二寸、家素清貧、事母至孝、公俸所營、皆施親友、云々。今按するに篁上野國司たりし事正史に見えず、たゞ鎌倉大草紙に云、足利學校は上代承和六年小野篁上野國司なりし時、勸請の由を記すといへども、公卿補任を考ふるに上野國司とせる事なし、ことに承和六年は隱岐國へ配流の中にして任國の沙汰に及ばず。

公卿補任云、承和五年十二月十五日止官、配流隱岐國、同七年四月召返、六月入京、被黃衣以拜謝、同八年閏九月十九日復本位、正五位下とあり、又日本後紀曰天長二乙巳年九月己巳詔云々、庚午太政官府應親王任國守事上總國常陸國上野國とみえられたれば、天長よりして後此三國は親王の國司の國と定められたれば、當朝臣任すべきにあらず、按るに篁忍ヶ岡に旅館ありしは陸奥守なりし時の事なるべし、足利學校も此時ならん、然るを上野國守と相誤ると見えたり、此社傳の説をもて考ふるに上野殿といひしは小野殿といふべきを後世誤りて傳へしにや、又陸奥國にも上野と云地名有て、是に篁居住あるによりて上野殿といふにや、もしくは又その地何となく忍岡を上野といひしにや、なほ尋ぬべし、今常陸國眞壁郡の内に上野殿といふ有、是等いかなる故に名付るかといふなし、或説に何かし殿などよふ事上古はなし、上野殿とよふ事いふかし關白道長公を入道殿、御堂殿など呼し事初となるにやと、然れども道長公を御堂殿とよひ、を初とすべしといへるは誤ならん、徳大寺の公定朝臣の尊身分脈にも攝政良房公を築殿と號し、其子關白基經公を極樂寺殿とよひし事見ゆ、良房公は

道長公より六代の祖なり、しかも篁と同時の人にて桓武帝延暦年中に生る、此時樂殿の號あれば篁を何殿と稱せし事ありけんもしらす。

江戸紀聞の著者は、論を待たずして非認すらく、今按るに小野篁上野の國司たる事正史に所見なきより江戸志にとかく辯じぬれど、是らの事論を待たずして牽合附會なる事しるべし、是全く小野といへるよりかゝる説もいできしならん、たゞ寛永以來の事はさもありぬべきか。

江戸圖說集覽は、神體篁にあらず手力雄命とせり。接るに砂子に小野篁といふは非なり、篁關東にて没焉たる事を聞かず、手力雄命にて、もと上野にあり、慶安の頃坂下にうつる。

武江披砂は更に奇説を載せて驚かせり。六辨園立路隨筆云、小野照崎明神、江戸阪本にあり、此神名照崎と云、盜賊にて上野に住で往來の妨となる、終に召取られて此阪本に於て刑せらる、其執心人を惱す依て神に祝ふとなり、今今祭禮等あり。其説一に出でず、左れば姑く論らはざるべし、明治元年神佛分離し、別當解職、社號を令稱に改め、同五年村社に列す。

○舊別當 同町百十八番地、天台宗嶺松院元と之が別當たり小野山禪定寺を號す、明治元年神佛分離のため解職、以前東叡山の末寺なりしが、方今は延曆寺に屬せり、諸寺院の項參照。○富士淺間社 境内にあり、文政年間、石をたゝみて富士山容を摸す、毎年六月一日參詣群集せん。

東都歲事記六月朔日富士參の條に、下谷小野照崎明神社地、文政十一年の夏、山を築けり。○祭禮 毎年九月十九日。

府内備考續編別當の書上に云、祭禮八月十九日、氏子町の内神輿相渡申候、古は九月十九日祭禮御座候處、日光御奉行御歸府御障に相成候に付、奉願にて、八月十九日と相定申候。東都歲事記八月十九日の條に云、下谷阪本小野照崎明神祭禮別當嶺松院、神輿一基、年々産子町々を渡す、産子の町々十八日より賑ひ、年によりて花出し、をどり等出す、當社は小野篁卿の靈社なり、九月十八日は篁卿歸洛の日なりとて祭禮を行ひしが、天明四辰年の頃より八月に改たり、又九月十九日は當社遷宮の日なりともいふ。近年に及びて、また九月に復せり。

○氏子町 當社の氏子は元とは、阪本一丁目、同二丁目、同三丁目、同四丁目、同袋町、御軍筋町、金杉町上下二町、新門稻荷、御具足町、山崎町一丁目同二丁目、山伏町、御切手町、阪本村、新阪本村、阪本入谷町、阪本裏町、右之外武家屋鋪なりしが、方今は左の十箇町なり。下谷阪本町一丁目、同二丁目、同三丁目、同四丁目、下谷入谷町、淺草光月町、下谷萬年町一丁目、同二丁目、下谷豊住町、下谷山伏町。

●鎮火神社

鎮火神社は下谷入谷町三百七十八番地にあり、淺草區松葉町に接す、祭神は火産靈神、彌都波能賣神、埴山毘賣神の三神にして、市内鎮火の爲めに、明治三年神田區花園町里俗秋葉の原に創建す、六年郷社に列し、二十一年同所が貨物停車場敷地となるや、今の入谷町に遷座す、素木の粗造にて間口二間、奥行九尺に過ぎず、廣前の石貌、創建當時の泰納と知られ、明治三年年と刻む、傍に社務所あり、境内廣く火除地となり、日露戰捷

紀念碑(海軍大將東郷平八郎書)建てり。

諸寺院

○辯蓮寺 下谷入谷町十八番地にあり、浄土宗淺草幡隨院末派、紫金山引接院と號す、寛文三年の創立にして、開山は僧蓮延寶元年三月廿八日寂阿彌陀如來を本尊とす、住職新田達定。

○良感寺 五十六番地にあり、同宗同末、安國山和順院と號す、僧良感寛永十八年寂の開基並に開山なり。

新編武藏風土記稿(豐島郡卷七)に云、本尊地藏世に是を入谷地藏或は延命地藏と稱す、立像にて弘法大師の作、前立の像は小野篁の作と云、開山良感、寛永十八年十月十日化す、寺實に龍宮出現子育寶珠と云もの一類あり、熊野社、稻荷社、秋葉社。

○眞源寺 六十二番地にあり、佛立山と號す、駿河國駿東郡金岡村光長寺末の日蓮宗なり、萬治二年利兵衛なる者開基し僧日融延寶九年三月廿二日寂を開山とす、本尊三寶、住職蓮池日經。

△鬼子母神堂 寺内にあり。入谷の鬼子母神と稱して著名なり。

新編武藏風土記稿に云、中老日法の作、日蓮開眼の像也、本寺より傳來と云、世に入谷鬼子母神と稱す。

俚言に「どうで有馬の水天宮、腔をつきぎの御門跡、恐れ入谷の鬼子母神」と聯らぬ。即ち是れ。

○長松寺 六十八番地にあり、月圓山清光院と號す、浄土宗京都智恩院末派、本尊阿彌陀、開山は僧實舉明曆二年十二月廿六日寂文化十年より常念佛執行。寺實に月の丸御影一幅あり。

新編武藏風土記稿に云、貞享年中記せし縁起の略に、法然念佛弘通の爲、伊勢太神宮へ參籠し、日輪を拜せしに、日輪の内に六字の名號分明にあらはれしかば、上人自是を寫し、今

の世に日の丸の名號と號す、日讀の本體なり、其夜神前にて持誦法樂に心を碎き、深更に及で月輪を拜せしに月輪の内に勢至の眞影並上人の姿、天童子左右より天蓋を捧る機映現せしかば、上人末世衆生のため此形相を寫し、月の丸御影と稱す、是伊勢月宮の本體なり、故有て當寺に安すと云ふ、故に世に月の丸の長松寺と呼べり。

○法清寺 七十二番地にあり、久翠山と號す、禪宗曹洞派、武藏國入間郡越生龍穩寺の末にして、慶安二年創建す、開山は僧鐵州寛文二十一年十一月廿一日寂釋迦如來を本尊とす。

○最上寺 七十九番地にあり、極善山智願院と號す、浄土宗京都智恩院末正保四年旗下の土野々山新兵衛法名行春院道隆徹心同丹後守及其妹 桑壽院等開基檀越として建立す、開山は僧專譽圓龍延寶七年五月廿日寂寺内に地藏堂あり。

○東運寺 八十一番地にあり、道見山長盛院と號す、浄土宗淺草幡隨院末派、慶安四年起立、開山は僧茂純延寶二年十月廿五日寂本尊彌陀及無冠藥師を安す。

△無冠藥師 新編武藏風土記稿に云、弘法大師の作、長三寸の座像なり、相傳ふ此像は正西と云僧の念持佛なり、明曆回祿の時、臥鉦と共に塗籠に收め置しに、塗籠災に罹り、鉦は泮解しかど、此像は少しも損せず、正西愈渴仰して、無冠藥師と號し、死期に及て當時に寄附すと云。

新編江戶志(三)に、略縁起曰、入皇五十二代嵯峨天皇御宇弘法大師御長ケ三寸全に造りし尊像也、慶安年中深川に正西法師といへる僧安置し奉り、明曆三年酉年大火の砌り此尊像の厨子に伏鉦を置て土藏に入れしに、殘らず土藏も灰燼となる火際りて見るに、尊像の伏鉦をかぶらせ給ひ、彼鉦は御肩に

入谷 庚申堂



小野 熊野神



根岸 圓光寺



流れとろけしに尊像はれつゝとして恙なし、正面法師偈仰  
肝にめいじ、夫より本所横綱の邊に柴の巻をむすひ崇敬し奉  
る、世人無冠り薬師如来と尊號せり、其外靈驗がそふるにい  
とまめちすと云ふ。

○英信寺 九十一番地にあり、紫雲山と號す、淨土宗深川靈  
巖寺の末寺なり、開山は僧靈巖にして寛永八年紫雲庵を此地に  
結ぶ後實曆中松平壹岐守英信卒したる時、一寺となす、弘法  
大師眞作と稱する三面の大黒像安置。

○泰壽院 九十五番地にあり、行春山と號す、淨土宗京都智  
恩院末派なり、最上寺と同じく正保年間旗下の土野々山新兵衛  
法名石 其妹法名茶 開基。

○宗慶寺 百一番地にあり、喜翁山と號す、禪宗曹洞派、上  
野國邑樂郡青柳茂林寺の末寺なり、慶派二年の創建にして、開  
山は僧快州正悦元文元年二月十九日歿開基は喜翁宗慶と云、本尊釋迦。

○法昌寺 百四番地にあり、日照山と號す、日蓮宗駿河國岡  
之宮光長寺の末寺にして、慶安元年下谷御切手町印も豊住町邊  
に草創し、後元文二年此地に遷せり、開山は僧日詔元祿七年三月四日歿  
本尊三寶を安置、寺内に毘砂門堂あり。

○正洞院 百六番地にあり、廣澤山と號す、曹洞宗常陸國久  
慈郡澤山村耕山寺の末寺にして、慶長五年右京大夫佐竹義宣室  
法名正洞院の開基、僧春虎の開山なり、元祿七年僧嶺中興す  
本尊釋迦の三尊を安す、共に運慶の作と云、山號の廣澤は此邊  
の古名なり。

新編武藏風土記稿に云、開山天洲春虎、元和元年五月廿七日  
寂す、開基は佐竹右京大夫義宣室、那須壹岐守政資の女なり  
法名正洞院明室珠光尼、天正十九年四月卒すと、されど佐竹  
家譜右京大夫義宣室、上州館林城主多賀谷修理亮女と見え、

那須家譜には那須壹岐守政資子、那須次郎資胤女佐竹義宣室  
と見ゆ、又家譜義宣は寛永十年正月廿五日卒すと記す、寺傳  
義宣の室天正に卒すと云、加之法證尼の字を加ふること皆年  
代祖語するに似たり、又當寺寛永八年の由緒書を里正傳次郎  
が家に傳へたり、當寺は元出羽國秋田に於て佐竹修理大夫建  
立、寺領百五十石を寄附ありしに、後故あり彼地に居ること能  
はず、當村に來り小菴を結び、同宗の林泉寺の地を買得して  
別に正洞院とす、林泉寺も元は同宗正覺寺といへる寺地なり  
しと傳へりと記す、これに據れば當寺元は秋田に草創し、後  
當所に來れるにて、廣澤山と稱するは直ちに林泉寺の山號を  
用ひしなるべし、堂内に正觀音を安す、坂東二十八番の寫に  
て元は境内に別堂ありしが、安永年中燬失して未再建に及ば  
ず、鐘樓、貞享二年八月鑄造の鐘をかく。

○感應寺 百十一番地にあり、寶塔山と號す、日蓮宗駿河國  
駿東郡岡之宮村光長寺の末派なり。本尊三寶を安す、開山は僧  
日鏡元和六年九月八日歿當寺初め相州小田原に起立せしが、同年今の淺草  
西福寺の寺地に移り、寛永十一年再び下谷に移しが、又其地を  
小泉源右衛門拜領せしかば、慶安三年此に轉せりと云境内に番  
神堂、大黒堂ありしが、同様に逢ひし後、未だ再建に及ばず、  
大黒は傳教大師の作と稱す。

○嶺照院 百十八番地にあり、小野山禪定寺と號す、天台宗  
近江延曆寺の末派にして、開山僧慶賢、寛永六年東叡山より寺  
地を賜りて草創せり、元は禪定寺と號せしが、延寶四年十月今  
の院號に改む、舊時小野照崎神社の別當たり、本尊藥師を安置  
す。

○隨德寺 百二十六番地にあり、光雲山自然院と號す、眞宗大  
谷派にして、開基は僧永順明曆三年四月初は湯島に在り、元祿十二

新編武藏風土記稿に云、開山天洲春虎、元和元年五月廿七日  
寂す、開基は佐竹右京大夫義宣室、那須壹岐守政資の女なり  
法名正洞院明室珠光尼、天正十九年四月卒すと、されど佐竹  
家譜右京大夫義宣室、上州館林城主多賀谷修理亮女と見え、

年今の地に根る、本尊立像の彌陀惠心僧都の作なり、又畫像三尊陀彌を安す、是も惠心の筆と云ふ。

○金得寺 百四十四番地にあり、金峰山と號す、曹洞宗淺草北清島町白泉寺の末寺なり、寛永十一年高山全得同十六年正之を創建し久山元長之を中興す、本尊釋迦、長八寸、惠心の作なり、又瀧野野軒の木像を置、其墳墓もあり、遊軒は寛政年間の人にて、武術に長せるを以て世に聞ゆ。

○正覺寺 百五十五番地にあり、台徳山と號す、曹洞宗淺草清島町天龍寺の末寺なり、元和三年將軍徳川秀忠台徳創建し、僧嚴開寛永五年六月廿三日行を開山とす、本尊釋迦。  
△辨天社 俗に金杉辨天と唱ふ、行基の作、立像長三尺八寸。  
△釋迦堂 丈六の釋迦を安す、開山の作、堂は廢して未だ再建に及ばず。

○喜實院 帝釋山宗感寺と號す、入谷町廿八番地にありしが今や其跡を絶つ、世に入谷庚申堂と呼ぶ、即ち是れなり。  
新編武藏風土記稿に云、本山修驗、京都聖護院末、帝釋山宗盛寺と號す、本尊不動は弘法大師の作、開山玄空寂年を失ふ小野照崎明神の社傳に、昔廻國の修驗快然と云もの參籠して病に侵されしに、神徳により平愈しければ、報賽の爲止りて明神に給仕し、喜實院と號す、今尙入谷にありと載たり、想ふに快然當院を開基せしにや。

庚申堂、木像聖徳太子の作、秘佛なり、京都八坂、大坂天王寺に安する庚申を合せて世に三庚申と云、日光御門主公辨法親王之染筆、青面金剛童子の六字一幅を此堂の什寶とす。  
○延命地藏 百三十番地と百四十四番との間なる路傍に石地藏一軀立てり、行人香華を手向く、延命地藏といふ、全得寺の

牽牛花の花輪を翫きてお土産物に召せといふ。  
○菊花壇 牽牛花が凋萎すれば、菊花壇を造りて、又縦覽に供せり、平生丸新は盆栽を造り、植惣は西洋草花を培ふ、其外入長、入十、入又、一般に四季の和洋草花を栽培せり。

市立入谷高等小學校  
市立入谷尋常高等小學校は、入谷町五十五番地にあり、明治三十二年四月の設立にして、校地四百四十坪、校舍二百三十五坪教室百六十九坪、體操場二百二十坪を有し、學級數尋常十、高等四學級あり、教員十三名、兒童數尋常男二百九十五名、高等男百四名、合計七百七十七名校長林俊彌。

私立豊實高等小學校  
私立豊實小學校は、下谷入谷町二十一番地にあり、明治十四年九月の設立にして校地百六十八坪、校舍五十八坪、教室四十六坪、體操場二十五坪あり、學級數尋常二學級、高等一學級、教員三名、兒童數男女百四十六名、設立者實方ヤス。

入谷土器  
入谷の邊、元と農隙に土器を焼く、入谷土器と稱して此地の産物なり。  
新編武藏風土記稿、坂本村の條に云、土俗村内を稱して入谷と唱へり、農隙に専ら土器を造る、是を入谷土器と唱へ、土地の産物とす、村内に土器の御用を勤る松井新左衛門と云もの住し、又日光御門主の職人仁右衛門と云ふもの居りて、専ら土器を造る。

下谷龍泉寺町  
位置及地勢  
下谷龍泉寺町、北は金杉下町に包まれ、東は日本堤を劃りとし北

側なり。  
●入谷の牽牛花  
東京の植木屋にて、牽牛花を培養するもの、入谷を以て第一とす、年々珍花を作り、夏季に至れば、每晚觀客群をなすを常とせり。

○培養の起原 明治二三年頃、近傍の寺院に於て、牽牛花の鉢植を造り、諸人に縱覽せしむ、是其の濫觴なり、明治十年頃に及び二三の植木屋あり、之が輩に倣ひ、入谷の牽牛花と稱し觀客を招けり、當時は猶微々たりしも爾來漸く世人の觀賞する所となり、明治十五年頃には花戸其數を倍し、東京花曆に算せられて星霜三十年、遂に今日の名聲を博するに至れり。

○開園期間 毎年七月孟蘭盆より開園し、八月下旬に至る、約五十日間。  
○同業者九軒 豊住町の北、阪本町三丁目東裏なり、同業者道を狹みて其兩側にあり、即ち丸新、入十、松本、植徳、入又、新應、入久、入長、植松、以上九軒なり。

○縱覽隨意 鉢植を陳列して、庶人の觀覽に供し、又賣價を附して之を懸げり、植惣、入又、新應、入久、入長、植松の六軒は縱覽無料。  
○木戸錢 丸新、入十、松本の三軒は木戸錢を徴收す、入十松本は大人三錢小人二錢、丸新は五錢に三錢。

○活人形 松本にては牽牛花の活人形を造る、牽牛花の葉と花にて衣裳を縫へるが、奇觀なり。  
○觀客の群集 開園期間、毎日九時頃迄を見頃とす、早起先づ不忍池畔に紅蓮、白蓮、花の開くを觀て、入谷へと歩を轉ずるあり、歸途根岸の笹の雪上野揚出しに立寄りて淺酌低吟するも亦一興ならむ、近傍の道筋には商人露店を張りて、軒の吊忍

豊島郡に隣り、東は淺草區新吉原及び千束町一丁目二丁目に堺し、南は入谷町と金杉町に接したり、地勢卑濕にして二三の池あり、町域廣く番地は一より四百十六に至る。  
○町名の起原並沿革  
下谷龍泉寺町、元と豊島郡峽田領に屬し、龍泉寺村と稱す、龍泉寺の領地にして、廣く新吉原町邊迄を包たりといふ。  
新編武藏風土記稿(豊島郡卷七)龍泉寺村、按に此邊吉原の地を始め、元は龍泉寺村と唱へ龍泉寺領なりし由、古は彼寺領にして村も廣かりしことある、郷名は傳へされど當所町分に屬せし地に千束稻荷と稱するあれば古へ千束郷なりしならんと、猶那の總説に辯せり、御打入已來御料にして、正保以後東叡山領となれり、延享二年村の西南を町屋に起立ありし處は龍泉寺と唱へり、發れる村分の北凡東は三之輪村、西北は金杉町、南は三ヶ町の田間及龍泉寺町なれど、境界交錯したれば、廣狹の丁數は辯し難し、又町方の西隅に少許の飛地あり、石神井用水を分水す、檢地は寛延三年神尾若狹守、曲淵豐後守札せり、戸數十八、高札は町分に建り。

小名 蓮田、第六天前、笹堤  
明治二年龍泉寺町と改む、二十四年三月元龍泉寺村、元三の輪村飛地字蓮田、元千束村の内字大門脇耕地を合し、改めて今の稱を唱ふ。  
○大音寺前  
町内に里谷大音寺前と稱する所あり。

○景況  
神社あり、龍神社(俗にか鳥様と云)といひ、千束稻荷といふ、大音寺前より吉原遊廓、日本堤に通ずるの邊、町家相接したり薄暮人力車を飛ばすは遊里に通客と知らる、廓者と稱し吉原

十五







枚商人五十一人と定めて其れく貸付くるなり、地代は昨年の相場上等一枚(二の酉まで)二圓五錢、一等一圓七十錢、二等一圓五十錢、三等一圓二十錢。

○貸店 各道筋兩側の長屋は、市を當込みて、戸毎に貸店の札を貼附す、貸店賃は左側が家賃の半箇月分、右側が同一箇月分にて、斯く左右其賃を異にするは、買物すべき歸途の人々が左側歸行の結果として往道の反對に此右側を通行すると豫期して望人多きを爲なりとぞ。

○巡査の警戒 當日淺草署にては吉原検査場、下谷署にては龍泉寺町西徳寺、猿若町憲兵屯所にては大音寺前に夫々出張所を設けて警戒し、近傍千束町太郎稻荷前、新谷町幸龍寺前、觀音裏、田町、五十軒、三澤堤、龍泉寺町、富士横間等何れも車止となす。

○吉原遊廓の諸門開放 是日午前一時より吉原遊廓の諸門を開き客を引くの手段をなす、斯く諸門を開放するは、市の日に限り、寒客蟻として帶の如く、陸續廓内に入り、花魁の張店を見物す、當夜甚だ賑ふ。

昨年十一月は八日が初酉にて、二十日が二の酉に當れり、左に兩日の光景を述べて、此記事を終ばんとす。

○初酉 久しく陰鬱なりし天氣は七日より漸く回復に向ひ、殊に夜に入りては、全晴れて星空となりたれば、八日の天氣は大丈夫なりと、諸商人は何れも宵の程より開店の仕度を整へて、明るるを遅しと待受け居たるに、豫想にも彌増せる好天氣となりて、風暖く、數日來の雨は塵を鎮めて、道さへ清らかに程好く乾上り、萬事又なき跳向きとなりたれば、何れも益々勢を得て、待間程なく参詣人の老若男女は朝の程より早續々と押出來りたれば、千束町通は云ふも更なり、新谷町、龍泉寺前通

り、大音寺前、吉原京町、病院裏門通りの雜沓一方ならず、淺草署よりは室山署長初め警部以下非番巡査百八十名程總出にて吉原検査所に出張所を置き、下谷署にても西徳寺に出張所を設けて警戒したり、扱社内には例年の通、熊手賣りが限なく店を張りて元氣よく客を呼び居たるも、午前は婦人八分の姿とて、人出の割合には賣行思はしからざりしかど、例の如く世間を飾る商人等が、二三圓の前金を拂つて汗交し置きし熊手をば三十圓五十圓と空直を呼ばせながら景氣好く手を打たせて、買求め去る連中少なからず、兎角に賑ひは此處を中心として、淺草公園より大音寺前までに擴がり行き、熊手、簪、頭の芋栗餅杯の商人等が耳を聳する計りに、聲を喧らして客を呼立つる様、申々勇ましく、中には、二の酉までなるを見越して存外安く見切りて手を打ち居たる者も見掛たりき、市の景氣此の如くなれば上野山下、淺草公園内外の飲食店は勿論、公園仲見世の諸商人は、朝來國旗を掲げ球燈を吊り、或は高張提灯を樹て、華々しく景氣を附けつ、天長節の降潰れを埋合はさんものと意氣込み居らざるは無く、正午頃より來る程の電車や、隅田川通の汽船を見れば、何れも客を満載し居らざるもの無くして、時々刻々と入出を増し居たり、午後に至りては彌が上の入出となり北行の電車は夜十時に至るも尚ほ滿員の札を掲げざるはなく、公園以北の道路は恰も人を以て埋められたり、殊に千束町通り新谷町、幸龍寺前通り、龍泉寺前通りの各道筋より各々驚神社を目覚めて押寄する人は、其勢は大川の決するが如く、漸次に吉原検査場裏門より吉原に繰り込みたるが、九時頃には殆んど其絶頂に達して、検査場裏門前の廣場は立錐の地も剩さず、例の彌次馬連は面白半分にワッショイ／＼と懸聲しながら、寄行くものから、老幼婦女は一度頭上げ踏み殺されは目前なる

●熊手の細工

下谷龍泉寺町、入谷町、金杉上町、同下町、淺草千束町邊、鶯神社近傍の民家にては、酉の市の賣物として其大立物たる熊手細工を多く内職とし、年中之に従事して、活計を立つるの奇觀を呈せり、また東京の名物ならんか。

○熊手の種類 五百餘番にして足らず、仔細に之を點檢すれば、殆んど類別する能はざるべし、左れと其重なる品は、

(一)臺形 熊手に七福神及び寶蓋し、注連繩を飾付たるを臺附と稱す、普通三十種位の裝飾品あり、大中小と區別す、その大なるに従ひ、愈々その複雑を極む、華美絢爛、光彩を放つものその價最貴。

(二)櫛形 熊手に櫛扇を飾付、中央にお福の面を置き、左右に大福帳と千兩箱あるを常とす、扇に竹材と折板とあり、折板は糊付とし、竹材は絲を以て膠る、無論上等の品は竹なり

(三)鬼熊 鬼熊手の略語なり、熊手の爪、粗らく硬なるよりいふ、又中央にお福の面、左右に大福帳、金萬兩、頂に當り矢を飾る、製作絶だ質素。

(四)掃き込 熊手に福面或は樹大黒(樹の内は黒比)之に稻穂を懸けたる三寸位の小形の品にて、價も低廉なり。

○寸法 最小形五寸以下を「シヤコ」と稱す、それより六寸、八寸、尺、尺二、尺三、尺五、二尺、三尺とあり、就中、尺乃至尺三を以て賣行よしとす、又割抜けて偉大なるは注文を受けて製作するなり、注文の品には定紋或は屋號を染め出す杯、各其好みあるべし、熊手の寸法は俗に骨と云ひ倣はせる熊手の首、即ち爪を標準として之を算するなり、柄の長さには據らず。

○帆 寶舟の形を以て其本體と定む、裝飾ある尋附には、多く帆を張るなり、轉じて櫓扇、鬼熊の帆を有せざるにも關らず

より自然と足下しどろに逃げ出さんとするれば、乾き切らざる土に下駄を取られんとし泣き聲立て、救ひを求むる者さへあるに尙ほ後よりは前へく／＼と懸け來る人數盡くべくもあらず、左れば老幼婦女子を検査所の軒下に避難するも多しありしかば、此所も亦何時しか人山を築きて、果ては子供の泣き叫ぶ聲物凄き程にて検査場裏手の廣場に出店したる二三の店の如き押し倒されたるものあり今や阿鼻叫喚の修羅場を演出せんとしたる一刹那、先程より群集を制し居たる、室町署長は寸時も猶豫ならずと検査場の門を開きて、屋内の廊下を通じて裏口より表に通せしめれば、漸く急を救ひ得たりき、斯の如き人出なりしかば従つて諸商人も各々相應の賣行きありて、頭の芋の店の如き早きは九時頃に賣れ什舞ひたるものあり孰れも荷は軽く懐重きやに見受けたり、又上野山下、淺草公園界隈の飲食店等も相應に客のありたる模様なりし。

○二の酉 二十日の二の酉は前夜よりの雨降續きて、朝の程は雲切れだに見えざりしかば、淺草田甫の如き熊手、頭の芋、栗餅、花巻、等にて僅かに十軒程の出店ありしのみ、夫れすら店に桐油をかけて雨濡れを防ぎ居れば、殆んど見る影もなき有様に、出店者五人三人其處此處に打集ひては、恨めしげに空を仰ぎ、青息を吐き居たるも詔かりし、左れば参詣人も皆無の姿にて、商物には直段なく、何れも半段にて、輪賣といふ無殘の景況なりしが、午前十時頃より、追々雲切れ正午頃には日脚を見せ、甲は一天カブリと晴れて、いと穩やかなる小春日和となりしかば、諸商人等は麻生の思ひにて、俄かに店の飾り立てを急ぎ居りしが、此邊一帶低地の事とて、僅の雨にも直に泥濘の汎濫を免がれず、沿路の泥濘は抱返されて、更に甚しかりし其中を、参詣人の追々賑ひ來るを見受けたり。

その表面を總て帆とは稱するなり。

○差し物 實盡し、七福神、三番叟の類、熊手の附屬品を「サシモノ」と總稱せり、或は綴り付るもあらむ、或は貼り付るもあらむ、されど申にて差しと低すが通例なるより、斯く唱ふるにや、又差物の中、大福帳を帳面、千兩箱を千兩、張板のおかめの假面を福面杯いへるは、彼等社會の通言なり。

○張抜 明治五六年頃までは、實盡し、七福神、差物は悉く張抜にて「熊手の手遊」と呼び、淺草黒船町の玩具問屋増田屋の專賣にして、府下數百戸の熊手屋を相手に營業し、その繁榮いふばかりなりし即ち製作多様に於て到底際師が自身之を細工する能はざりしより、その附屬品一切増田屋に仰ぎたるなり。

○切抜 しかるに、三ノ輪邊に鎌田吉兵衛といへる翁ありき、始めて切抜の差物を工夫す、爾來年々張抜は衰へて、方今は殆んど切抜のみとなれり、切抜は刷込刷毛か、或は鉛筆を用ひて一定の型を描き、之を缺めて切抜くまでの仕事なれば、その法最も簡易なり、且つ型と稱するも、鑄型、木型には非らず、只一枚の紙型あれば足れり、斯く輕便なるより復々増田屋に注文する者なく、自家に於て之を製作せり、張抜の法は福面に其餘波を存す、されどそれすら他に依頼せず、之を自製せり。

○ニス使用法の發見 舊來の膠は之を彩具に和するに、光澤貧なり、明治十五六年頃其氏あり、始めてニスの使用法を發見す、即ち舶來の白ニス(膏状の目場)を得て之をアルキールに溶解し、膠に代用したるに、成績良好なり、因て其法を知人中川爲八に傳ふ、幾多なく又和ニス(五錢位)を用う、舶來品に比して其價遙かに低廉なり、工人爭ふて之に倣ひ、方今また膠を使用する者なし、驚く可きは人智の開發にして、遂に和ニスすらも發見より之を購ふものなく、自家之を製造するに至れり。

○原料 以前は、差し物に張子紙を用たりしも、今や一切ボールを以て之を製作せり、又熊手及び其差し物に貼付すべき串など總ての竹材は之を千住の竹河岸に仰ぐ、されば酉の市の間際には、東京府下の竹の相場を狂はしむるとまでいへり、串は逸早く削り置くも、熊手は青々しからねば、客足を惹く能はざるより、その機に臨みて之を仕込むなり。

○熊手職 專業に營むものはあらず、多く農家及び植木職の片手間なり、淺草千束町二丁目、下谷龍泉寺町、金杉上下、入谷町、熊神社の界隈に二百七八十戸あり、十軒長屋、二十軒長屋が年中、差し物の内職に其日を暮らす。

○手間賃 問屋にては、それなく職工を督して、之を製作するに、その手間は三食持にて、彩色を施すと繪を畫く者は、日當壹圓、仕上する職工は五拾錢の給料なる由。

○今昔の問屋 明治初年、盛んに製造したる問屋は、大音寺前の芋屋大右衛門、同農近藤仙太郎、入谷町の植木職丸新、新龜、植惣等ならんか、又現今極上の熊手屋は下谷金杉上町の釣竹同舊水の谷邸内の松崎常吉、中川爲八、龍泉寺町の荒川長之助等なり、廊内はいふまでもなし、市中屈指の商家の依頼を受け近藤家戸の注文に應じ手擴く業を營みつゝあるなり。

○相場 年々異同あり、昨年は三尺物にて參圓以上參圓五拾錢位、二尺物にて壹圓七拾錢より貳圓位尺五は壹圓内外、尺二は壹圓五六拾錢尺は參圓拾錢、八寸が拾五錢乃至貳拾錢位、六寸が拾錢位、シヤコは四五錢乃至七八錢位、掃込は日本壹圓、楡扇は三尺物壹圓五拾錢、鬼熊の尺なるは六七拾錢位なり、又東京の市にて賣残り熊手は大宮、越ヶ谷、其他の市に持ち運ぶより翌年に持越すは稀なりとぞ。



熊手屋の町並  
紙の用途(5)



熊手屋の町並  
紙の用途(5)

●諸寺院

○西徳寺 龍泉寺附四十五番地にあり、眞宗佛光寺門跡下谷

別院と稱す、光照山と號し、山門東に面す、左右筋堀(明治三十四年六月造)を築き、南に脇門あり、表門より入れば、左に興書院新築費寄附建札あり、其傍鐘堂並に水屋あり、正而は本堂にして、右に玄關庫裡相接す、左に太子堂あり、運慶作聖德太子の木像を置く、堂宇總伽藍造、廻廊を架し、二重柱、榭紐あり、勾欄、向拜唐戸に至るまで所謂眞宗の建築として、精巧を極めたり、當寺元と京都五條坊門に在りたる寺跡を本郷金助町に移して、本山の別院としたるものとす、僧善如の開基なり、天和三年今の地に移すといふ、重なる什寶左の如し。

本尊阿彌陀如來(運慶) 一軀、開山親鸞木像一軀、聖德太子木像(運慶) 一軀、聖德太子書傳十幅、六字名號(運慶) 一幅、屏風形六幅(法然上人) 一幅、六字名號(運慶) 一幅、阿彌陀如來畫像(法然上人) 一幅、圓光大師畫像(同) 六字名號(師筆) 一幅、阿彌陀如來畫像(同) 二幅、見眞大師畫像(同) 一幅、見眞大師消息(同) 一幅、名號石(同) 一箇、聖德太子畫像(同) 一幅、十字名號(通如上人) 一幅、七高祖畫像(同) 一幅、了源上人畫像(同) 一幅。

△菅沼斐雄墓 寺内に歌人菅沼斐雄の墓あり、斐雄通稱は頼母、和歌を香川景樹に學び、景樹の江戸を去るや、其隅田川夕陰館を預れり、天保五年歿す。

○大照寺 同町五十二番地にあり、正覺山と號す、淨土宗京都知恩院の末派なり、享保三年火災に類焼して起立沿革其に詳にせず、僧森學(享保十年) 中興す、春日作といへる三尊彌陀を本尊とし、又旭如來と稱する像を置く、寺門東に面し、門前に人力車立場あり、此邊俚俗大音寺前と呼ぶ。

○大照寺 六十三番地にあり。

○正實寺 九十三番地にあり。

○長國寺 百六番地にあり、本立山と號す、日蓮宗上總國長柄郡鷲巢村鷲山寺の末派なり、寛永七年淺草元鳥越に創し、同九年今の地に移る、開山は僧日乾、開基は坂本傳右衛門と云ふ、鷲神社は元と當寺内に在りたるものなり、開運妙見大菩薩安置、毎年十一月酉の日、開運の守護札を出す、鷲神社と境内相接して甚だ雜沓す、寺内に吉田文魚の墓あり。

○龍泉寺 四百一番地にあり、眞言宗智山派にして、山門に掲げたりし額は關其寧の書なり、住職宮崎榮瑞、往時は巨利にして、此邊龍泉寺村と稱し、其寺領たりしといへり、今猶町を龍泉寺の名に呼べり、千束稻荷も元と當寺の持なり、神佛分離して神社獨立す、門前に弘法大師御府内二十一箇所、第十三番としたる梗石を建て、本堂に隣りて遍照殿あり。

●正燈寺の紅葉

○月洲寺 四百番地にあり、瑞光寺と號す、禪宗芝金地院末寺。正燈寺は下谷龍泉寺町七十五番地にあり、東陽山と號す、禪宗妙心寺の末派なり、開山僧寶鑑、往時紅葉を以て其名聞えたり。江戸砂子(二)に云、東陽山正燈寺、妙心末、龍泉寺町、當時もみぢの名とをるなり、高雄の苗をうゆる故に、高雄の紅葉といひきたれり。

補に云、近年山ふきを植ゑて池邊の春秋を弄遊客多し。新編江戸志(三)に云、紅葉の名所にて觀遊の人秋毎に多し。當寺の紅葉は高雄の苗をもて植るよし。江戸名所圖會(十七)に云、當寺の後園楓樹多し(其先山城高雄山の楓樹の苗を栽と云)晩秋の頃は詞人吟客こゝに群遊し、其紅艶を賞す、又云、庭中楓樹最おほくして、晩秋の紅錦は海晏寺の園林にも劣る色なく、實に一時の奇觀たり、とて其

圖を載せたり。  
 江戸名所花曆(秋)に云、當寺もみぢの名所にして、高雄の苗をうける、近き頃はみだりに見物をゆるさずしかりといへども、遊覧庭中に入るといへども敢てまた答ひることもなし、たゞ掃除のときかざるをばづと見えたり、明和安永の頃は楓とだにいへば人々正燈寺と心得たるほどに盛なりとぞ。  
 と、然るに今や其係を失ひ、枯朽したる楓樹一株、門前に存するを見るのみ、境内多く貸地とし、池の山吹すら餘波を止めず、紅葉と共に忘れ果てたり。

●市立東盛尋常小學校

市立東盛尋常高等小學校は、下谷龍泉寺町三百七十九番地にあり、明治二十一年五月の設立にして、校地坪數四百七十五坪、校舍三百二十三坪、教室百二十九坪、體操場百八十五坪を有し、學級數尋常八學級、高等四學級あり、教員十二名、兒童數尋常科女三百四十九名、高等科女六十四名合計六百三名、校長加藤智光。

●金魚商

龍泉寺町の邊は、泉濕の地にして、池あり、溝あり、人家の裏には泥土深き蓮田を存せり、左れば本所深川と併稱せられて、金魚を飼養するもの多く、今猶三軒あり、平井庄太郎(一番地六番地)平井豊吉(四十一番地)宮崎龍次郎(二百十八番地)是れなり、孰れも千坪近き地面に深さ二尺四五寸、廣さ普通水田位の養魚池と、藻を潜る淺き叩土十五枚乃至二十枚を設けて、其數萬尾を放つ、期節は毎年三四月頃より六月中旬までとし、盛んに地方に搬出す、和金琉金の二種にて、格別珍種は出さるも最も産額に富む。

●下谷坂本町

○位置及地勢

十貫文江戸廣澤内代山根岸源七郎分と載す、源七郎は太田源七郎なるべし、又役帳太田新六郎知行百六十七貫文江戸廣澤三ヶ村ともあり、廣澤は則此邊のことにして、根岸は金杉村の小名に残れり、代山の名は今其所を詳にせず、長祿年中に江戸古圖と云ものに金杉村の傍に續て根岸代山廣澤の三村を載す、寛永年間より村内西方を次第に町屋を起立ありしより其地は町奉行支配に屬して坂本町と稱す、又南の方山崎町に邊する地町屋になりし處は新坂本町と唱へ、東叡山の麓にありし地は御地用となりしより、淺草及深川にて代地を賜はり、淺草坂本町、深川坂本代地町と號す、又傳次郎(名主)が所藏せる右細代官永田九郎兵衛、中里平右衛門より出せる明暦二年の割付に村内、若干の地町屋敷となり、又依田肥前同心屋敷水谷伊勢守等の屋敷に渡ししことを載せ、又野村彦大夫より出せし萬治二年の割付に明暦三酉、萬治二年亥の二度に松平主殿頭、本多能登守、藏福寺、新智恩寺、白泉寺、天龍寺、長光寺、其外新寺町等の地に渡りしことを載せ、又寛文中同人の割付に寛文元年關兵部が屋敷前往還となり、同二年立花飛騨守、松平備後守、同三年善養寺、同五年加藤織部正、同十二年松平淡路守等の屋敷に賜りしことを載せたり、これより後この地は淺草及下谷の地に屬せり、然りしより今村内四境東は淺草東光院持添地の御鷹及小笠原兵庫、加藤山城守屋敷立花左近將監下屋敷、岡肥前守屋敷、水谷兵庫下屋敷、南は下谷御切手町、同山崎町、同新坂本町及松平淡路守中屋敷淺草海禪寺西は坂本町、北は下谷龍泉寺町、同金杉町金杉村なり、東西六丁餘、南北五丁許、長戸六十二餘は悉く借地のもの住せり土俗村内を概して入谷と唱へり(中略)御打入の後には御料所にて東叡山草創の後御宮領となれり、檢地は天正

下谷坂本町は四丁あり。  
 一丁目、南は善養寺町、上野山下町と其境界を交へ、西は上野櫻木町、東は下谷豐佳町並に入谷町の一部に接し、北は坂本町二丁目に連なる、地勢平坦なり、番地の區劃一より二十二に至る。

二丁目、西は上野櫻木町、東は下谷入谷町に接し、南は坂本町一丁目、北は同三丁目に連なり、地勢平坦、番地の區劃一より三十に至る、但し第十六を缺けり。  
 三丁目、西は上野櫻木町と下谷上根岸町の一部及び下谷鎌筒町に接し、東は下谷入谷町に隣り、南は坂本町二丁目、北は同四丁目に連接せり。番地の區劃一より三十一に至るも、其内二十二番地より二十四番地及二十六番地より二十八番地まで缺けたり。  
 四丁目、西は下谷鎌筒町、坂本裏町に接し、東は下谷入谷町にして、南は坂本町三丁目に連なり、北は金杉上町とす、地勢亦同じ番地の區劃一より三十二に至る。

●町名の起原沿革

下谷坂本町、往時畷田領坂本村の地に屬す、徳川氏入國以來町家増殖し、天和年中既に古町新町の稱あり、其後延享四年市街に別し、今稱を加へて四箇町に分てり。  
 新編武藏風土記稿(豊島郡卷七)に云、坂本村は東叡山の東北にあり、されば東叡山御建立の時代、比叡山の十津坂本に擬して名付られしと云へど、名主傳次郎が所藏天正十九年の水帳に坂本、坂本前、坂本屋敷前などの名あり、且上野郷と記したれば當村寛永御創建前よりの名なること、しるる、又坂本町の傳へ元龜の頃この邊を二葉郷廣澤村と唱へし由、今村内正洞院の山號を廣澤山と號し、又北條役帳太田新六郎知行二

十九年慶安及明暦の度に改あり、後又前村に同く寛延三年に糺あり、云々、小名小沼、前田、芝田、向ッ田、前沼、カサヒバン。

舊坂本村といへるは今の入谷町を包含せり、當町は前記の如く延享年間既に街に列し坂本町と稱せり、明治十二年四月下谷小野照町を四丁目の地に合併す。

●景況

上野山下町より南千住に通ずる奥羽街道筋にして、近年市區改正の爲め道路取擴げらる、商家櫛比し繁華の地なり、二丁目に鷄卵商山田屋小山金次郎(九番地)三三四三番地、源兵衛、(十八番地)獸島肉商原田まん(十一番地)三三三三番地、源兵衛、岡野徳之助(十九番地)一三八六番地、三丁目に紙商鍵屋橋本、源之助(三番地)三三七番地、洋服店加藤源太郎(四番地)二一六番地、源兵衛、鈴木岩右衛門(六番地)醫師吉野部弘喜(三番地)四丁目に質店三河屋村田彦八郎(六番地)八四三番地、伊木勝太郎(九番地)等あり

●私立代用渡邊小學校

私立代用渡邊小學校は、下谷坂本町四丁目一番地にあり、明治六年一月の設立にして校地二百四十三坪、校舍二百坪教室、百三十二坪、體操場百十五坪を有し、學級數尋常四學級、高等三學級あり、教員九名、兒童數尋常男百二十七名、女百五十四名、合計三百四十二名、設立者渡邊六郎。

●金杉の名稱

金杉町は昔の金杉村にて畷田領なり。其の名古くより見えたり新編武藏風土記稿に云相模國鶴岡八幡宮神主大伴氏所藏應永六年の文書に武藏國豊高郡小具郷内江戸金曾木三郎跡事云々とあり。小具は近郷今の尾久村なるべければ、金曾木は當所の在名を氏に稱せしならん。果して然らんに、是より前正和元年延

文二年等の頼岡八幡宮寄進狀に。武藏國金曾木彦三郎重定所領云々など記せしむ三郎が同族なるべし。又北條役帳に飯倉彈正忠十一貫二百八十文千東内金杉分と載せたり。千東は今も近郷に其名あれば。當時は全く彼郷に隸せし事知らる。御打入の後には御料所なりしが。正保三年東叡山領となり。次第に町地出來て金杉上町下町と唱ふ。

●下谷金杉上町

◎位階及地勢

下谷金杉上町は當區の北位にありて。一部は奥州街道に當り。一部は淺草區の方面に延びたり。東南は龍泉寺町に連り。西は中根岸町に接し。北は下根岸町と金杉下町に臨めり。其の狀形不正の入字を成し。總て低地にして。處々に溝渠あり。又百二番地には池沼あり。土地の區劃は一より百〇三に至る。

◎町名の起原並沿革

下谷金杉上町はもと金杉村の内にして。正保三年東叡山領となり。市店を開設し上町下町と唱へ。寺社奉行支配町並屋敷なりしが。延享二年町奉行の支配となり。明治二十四年三月同町の飛地を併合せり。

◎景況

當町は奥州街道に當れる部分は市店密接し。人馬絡繹たれども。其の他はあまり繁華ならず。四十四番地に金杉上町郵便局。八番地に東京下谷區足袋商組合事務所。八十番地に不動の小堂。九十一番地に水之家と稱する鑛泉旅館。百三番地に中島を有せし稍々大なる池沼あり。又百一番地には佐久間工場（三十四年十月設立）と天製造あり。

●三島神社

三島神社は金杉上町二十一番地字火除に在り神社は西面して奥

州街道に向へり。前方の鳥居には千秋不朽萬歲不易と刻す。明治三十五年六月の再建に係る。傍に三島神社華表之碑を建つ。撰文は東京市長尾崎行雄なり。梵路外に石燈籠ありて並立す。此には光破四表の四字を分刻せり。中根岸嶺の書する所。又北畔に火除稻荷神社の小支社あり。

●萬徳寺

萬徳寺は金杉上町六十二番地に在り。佛名山と號し。徳川院と稱す。淨土宗にして京都知恩院の末派なり。開山を明然和尚とす。

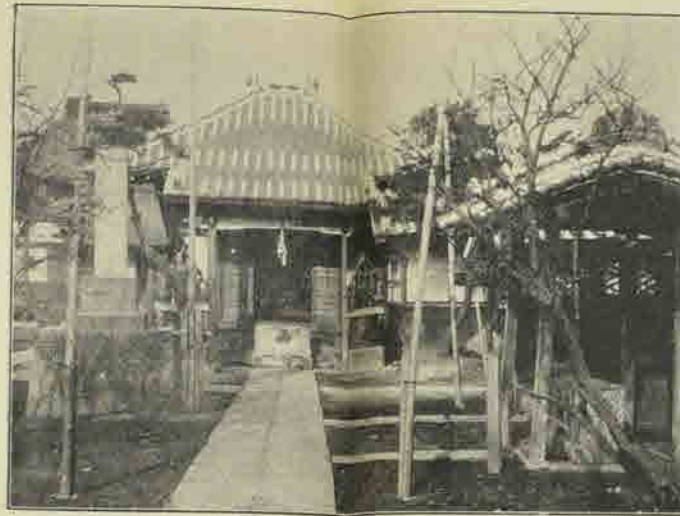
初め上野國新田郡徳川村に在りしが後三河國岡崎に移り。江戸開府の後湯島切通しに轉し。天和三年に至り此地に移るといふ。本尊如意輪觀世音の像は俗に火除觀音と稱す。明暦の大火に際し。不思議にも獨り其の災を免れたるに因る。

●了源院

了源院は金杉上町八十四番地に在り覺法山と號す。臨濟宗にして京都妙心寺の末派なり。緣起の略に云。往昔鎌倉建長寺の開山大覺禪師。西土の長白山に登り。毘首羯磨の造れる觀音の像を得ず。歸朝の日之を携來り。巨福山を開くに及びて山中に安置す。其の後故あり。佐久間貞國に傳り元弘の役に貞國苦戰して危かりし時此像の號を念誦し。難を免るゝを得たり。因て信ずること深く。既にして世をいとひ。此像を護持して下野國に來り。那須に住す。正保元年に至り。若原道治といへるもの當寺を開基して。此像を安置す。道治の祖は貞國に仕へし者なりといふ。而して特翁禪師開山たり。觀音の像は火厄除觀音と稱し。主人は火除觀音といひ。此邊の小名をも火除と呼べるよし。



大鷲神社



恩子母神社



下谷區役所



東盛小學校



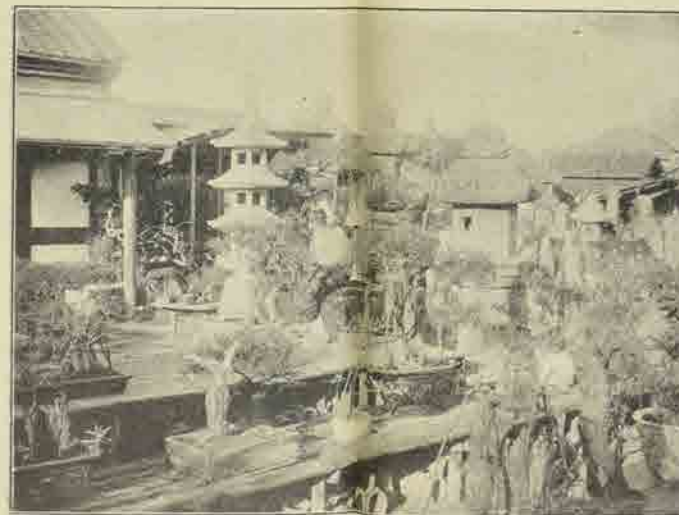
入十



萬年町尋常小學校(種特)



阪本町通



新入



小野照崎神社

(坪川辰雄撮影)

●下谷金杉下町

◎位置及地勢

下谷金杉下町は當區の北東に位し。東は日本堤に連り。西は長く延びて。下根岸町に對し。南は龍泉寺町に接し。北は三之輪町に沿ひたり。而して奥州街道其の一部を貫く。地勢は他と同じく低窪にして。溝渠其の東邊に通ず。土地の區劃番號は一より百〇三に至る。

◎町名の起原並沿革

下谷金杉下町は元金杉村の内にして。金杉下町と稱したる地なり。明治二十四年三月元金杉村飛地字千束を加へたり。

●壽永寺

壽永寺は金杉下町六十八番地に在り。正覺山と號し。眞如律院と稱す。淨土宗にして京都知恩院の末なり。現住職は澤眞誠師開山は曉譽位産和尚(慶安五年八月二十日寂)開基は得生院壽永法尼なり。法尼は崇源院殿即ち徳川秀忠公の夫人淺井氏に仕へ。後ち薙髮して寛永七年當寺を草創し。自ら其の第二世となり。寛文四年七月二十日寂す。申興眞如散首は當時の學僧にて高德の間を高かりしを以て。増上寺走譽大僧正爲めに奏聞を経て淨土律場と爲し。中興の祖とす。敬首は寛延元年九月二十日寂せり。

寶物の重なるものは。彌陀三尊の畫像なり。唐の善導大師の筆なりといひ傳ふ。

門は瓦葺赤門にて記者の至りし時は鎖しありて入るを得ざりしは遺憾なりし。

●文化文政年間金杉居住の文士

文政元年發兌の諸家人名録を檢せしに。當時金杉には左の文士居住せしよしを記せり。

學者	北山	名僧有字天禧江戸人又號孝經樓主人一號學半堂	下谷	山本	喜六
書畫	細桃	字如雪北山後室	金杉	山本	多美
學者	繩齋	名辨字子耕又號佛場伊豆人	同	石井	俊助
同	可亭	名欣與字春樹伊勢人	同	間野喜一郎	
書	彌潭	名規字子則	同	鈴木藤之進	
書	小鸞	字春綠	同	粟氏	女

文政三年の根岸圖に徴すれば。千束稻荷の先に北山アト仙女アトと見えたり。

●下谷三之輪町

◎位置及地勢

下谷三之輪町は當區の東北隅に位し。東方は淺草區に界し。西北の二方北豊島郡に隣り。南方は金杉下町に對せり。而して其の一部は奥州街道を挾み。其の一部は日本堤を越えたり。地勢は低くして溝渠は西北より東向して流過す。土地の番號は一より百七十三に至る。

◎町名の起原並沿革

下谷三之輪町は往昔峽田領に屬せし地にして。小田原役帳に箕輪守屋とあり。江戸古圖に箕輪高屋と記し。正保の改に三輪原宿と載す。住古此邊はすべて曠野にて三ノ輪原と唱へしと云。元祿の改には今の如く記せり。延享二年村内を割きて原宿町を別ちしより村内六分して。其の境界錯雜せり一は千住南組の南に在り。一は千住南組淺草橋場町今戸町入會地に在り。一は日本堤の西南に在り。一は其の東に在り。一は淺草山谷町の西に在り。村内又彦五郎分と稱する一小地ありて。三河島の人彦五郎の私有に係る。内原宿町は下谷三の輪町と稱し。舊東叡山領なりしに。明治三年八月之を下谷原宿町と改稱し。同五年華族大關家の邸其の他の土地を併合せり。又下谷藥王寺町と唱へたる

處あり。享保二年より市街地となり。藥王寺門前と呼び。明治二年町名とせり。現今の三之輪町は此の下谷原宿町、下谷藥王寺町。寺地及び三の輪村の内を合したるものなり。同二十四年三月元三の輪村字本村(一部を除く)字道久塚の内水路以南の地を加へたり。

◎景況

當町は奥州街道に當りし部分は來往繁劇なれども其の他は概して喧雜ならず。七十七番地に子爵松平忠敬。八十八番地に鐵山業吉田千足。八十九番地に青田綱三。十番地に諸官省用達石垣甲子藏の諸氏あり。三十四番地に伊藤氏の晒箔製造の工場あり又梅林寺近傍には貸屋等の新設しあるを見る。

●藥王寺

藥王寺は三之輪町十二番地に在り。東光山と號し。長命院と稱す。天台宗にして上野寛永寺の末なり。現住職は金剛慈雄師。創立の年月詳かならず。寛永三年僧源水此か中興たり。當寺には有名なる背向地藏あり。昔時奥州街道の傍に在りたりしが。後ち其の道筋改り。後背の箕輪町通りとなりたるより。俗に此稱ありといふ。又徳治年間古碑及び證據の松ありとの事なれども。未だ實見せず。

表門は黒塗にて前に藥師瑠璃光如來と刻したる石標を建つ。地藏堂は門内左の方に在りて其の名の如く道路に其の背を向けたり。右には壇家有志者の納めたる皇軍戦利記念品即ち露軍沈設本雷(重量六十貫)同十吋砲彈(同三十五貫)を頓置す。堂前に東光梅あり古木榎樹愛すべし。傍に背面地藏尊の巨碑あり。明治三十四年八月建る所に係る。

●永久寺

永久寺は三之輪町八十三番地に在り。天台宗にして上野寛永寺

中養壽院の末なり。現住職は關根教寬師。寛文七年山野嘉右衛門藤原永久の建る所にして。元祿七年僧主海之を中興せり。往昔は眞言宗にて唯識院と稱す。後ち僧道安再興して禪刹とし。白岩寺といふ。既にして四谷本源寺の法弟月窓之を修理し。大乗坊蓮臺寺と改稱して日蓮宗に所屬し居りしが。月窓後ち天台宗に轉じ。本寺を建つ即ち圭海なり。本尊阿彌陀如來は藤原秀衡建立中の一體にして運慶の作なりといふ。

●山野姓藤原永久武道嗜暄于世族也

山野姓藤原永久武道嗜暄于世族也。永久寺草創大檀主金剛院殿透關宗鐵居士。時寛文第二十在丁未。十三日。側面に施主山野積松丸と刻せり。

●梅林寺

梅林寺は三之輪九十一番地に在り。花嶽山と號す。曹洞宗にして常陸國宇治合村源照寺の末なり。現住職は喜谷良哉師。文祿三年日龍師の開基にて。初めは小塚原に在りて龍源寺と稱せしが。安房里見氏の臣平井長次といへるもの綱敷天神の像を當寺に納めしより更に梅林寺と改稱し此地に移りぬ。綱敷天神の像は里見氏の什寶にて國府臺城の鎮守なりといひ傳へ比叡山法性坊尊意の作る所なりといふ。新編武藏風土記に云。寺記に承應三年の起立といへど。開山天室修悅は文祿三年二月二十日寂せしなれば。承應は當所に移り

し時の年曆なるべし。此説に據れば今。文祿三年の開基と唱へ居るも東覺なし。墓域に入り。寺僧の墓を檢せしに。當寺開基天外榮和尙とのみありて。年月を刻せず。因て之を判定するを得ざりし。今に至り堂前に數株の梅あり。二月八日記者の至りし時は。花已に綻ぶ。寺名に負かざりしは殊に喜ばしかりき。

●日本堤

日本堤當區に於ては龍泉寺町。金杉下町。三之輪町の三ヶ所に沿接す。乃ち荒川の除水堤にして淺草區聖天町より當區三之輪に至る。長十三町餘馬踏四間高一丈あり。

紫一本に云。日本國の諸大名集りて築き給ふ。江戸水除の土手なればかく名付しと。

洞房語圖に云。元和六年台命ありて在府の諸侯家々の旌旗を建前後六十餘日にて成就したれば名付と。

右の説果して然るや否やを知らずと雖も。正保四年の江戸圖に日本堤の名已に見ゆれば。其の以前築きしには相違なかるべしといふ。

支政の根岸圖に日本堤の北即ち水田の處に。富士。水にウツルとあり今はいかにや。

●下谷笹筒町

◎位置及地勢

下谷笹筒町は阪本裏町に續きたる小市街にして。東は阪本町四丁目に連り。南は同三丁目に沿ひ。溝渠其の界を成し。西は上根岸町に北は中根岸町に對せり。地勢は高からず。土地の區畫番號は一より十に至る。

◎町名の起原並沿革

下谷笹筒町は寛永九年幕府の御鐵砲御算筒奉行組の同心に役地

として給與せし地なるを以て其名あり。其の後市街となり。享保九年より公役銀を納む。領地主は金井、新島、小林、近藤、小野、村田、田吹、戸田、坪田の諸氏なりき。明治以後御の字を除き今の名に改む。

●下谷坂本裏町

◎位置及地勢

下谷坂本裏町は一小市街にして。東は坂本町四丁目に對し。西北は中根岸町に接し。南は笹筒町に臨めり。土地の區劃番號は僅かに六に過ぎず。地勢は素よし高からず。

◎町名の起原並沿革

下谷坂本裏町は延享二年坂本町を開設せし際其の西方裏面に當れるを以て此名を附せり。明治二十四年三月に至り。元金杉村石神井用水以南を合せしより東京案内に見えたり。

●札の辻

ヤツチャ場

札の辻は笹筒町と坂本町三丁目目の界をいふ。幕府執政の當時此處に高札を建置しを以て其の名を存せり。芝高繩にも同名の地あり。其の義同し。

ヤツチャ場とは蔬菜市場の俗稱にて。笹筒町一番地より八番地に至り。中根岸町一番地より四番地に至る。毎日此處に於て蔬菜の市を開く其の賣買の符號を呼ぶの聲。恰もヤツチャくと聞ゆるを以て此稱あり。

●下谷上根岸町

◎位置及地勢

下谷上根岸町は東叡山の東北麓に在りて。上野櫻木町を擁し。東は中根岸町に接し。西北は總て北豊島郡日暮里村大字金杉に接し。南は山麓なる舊日本鐵道線路に沿ひたり。地勢素より低し。石神井川用水市郡の境界を成す。土地の區畫番號は一より



町名の起原并沿革

根岸及近傍圖の解説に云。東京根岸の里は武州豊島郡金杉村の地なりしに。明治二十二年五月一日より村内石神井用水以南の地下谷区内に編入せられて。上中下根岸町となり。以北は日暮里村に入れり。本村は應永年中の文書に。金曾木と記せり。金曾木と云地名は處々に在り。鉦を古くは「かな」といひ。「そぎ」は殺きの意にて。秣の厚きものを云。産物を地名とせしものか天正の文書には既に金杉と見ゆ。正保三年東叡山領となり。金杉町分れてより。村内中央以南の地の字を根岸(南部)杉ノ崎(西北又新田)中村(東北)大塚(更に東北)と分ち稱せしかど。根岸其南部に在れば。江戸の方よりは概して根岸と稱したり。地名は上野山の根岸にあれば起れり。長祿江戸圖といふものに。金杉村根岸村と並へてあれど。偽選の圖なれば取るに足らず。

今昔の景況

同圖の解説に云。一村の民戸昔八十八戸なりしに。後に三十六戸に分れ。文化文政の頃は二百三十戸なりき。此地は上野山の北陰にて。自ら幽邃閑雅なれば。都下の士民多くて。別荘なと設けて。文政天保の頃は最も盛にて。天保六年の諸家人名録を見れば。此地に住せる文人のみにて三十名もあり。然るに天保の華奢嚴禁の政令にて。武家町人の百姓地住居を禁せられ。悉く引拂ひて根岸は一時原野の如くなりしと傳ふ。天保十二年正月五日又村内貝塚の地より失火して金杉坂本入谷まで焼き拂へり。三四十年前までは。山際には狐狸山兎なども多く棲みたりと云。其後次第に都人の來り住するものありて。明治維新後に至り愈盛にて。今は田圃まで人家となり。華族文人百般技藝

家の居軒を接して。去年の調に根岸三町のみにて。九百七十五戸あり。幽靜の趣は昔の如くならざれど。尙塵外の小天地なり。

當町現住者は華族には五十五番地に子爵松平頼安。畫家には二十九番地に小堀朝音。六十六番地に尾竹國親、墨崎修齋、弘道會員には四十二番地に野阪貞次。四十八番地に宗谷信行。百三十番地に太田謹。實業家には八番地に並河靖之(勳章師電話一三四〇)十二番地に金澤巖(秋津館藥行電話二二五九)十三番地に桑田利之(鍵屋賣商電話二二五九)二十番地に爲田文太郎(鑛業電話一六九一)百十三番地に郡司平六(瀧野賣藥電話二四五二)百二十一番地に小泉亥子吉(美濃屋酒商電話五九六)の諸氏あり又有名なる木の實庵、肴舎あり別項名物の條に記する所の如し。

臺の下

臺の下は上根岸町八十三番地より百三番地に至る土地の稱にて往時は松原と田圃なりしよしなるが今は皆人家となれり。名有なる五本松は此臺の下の上即ち上野の津梁院は北裏崖上にある數株の松をいふ其の傍に笠松と稱するもあり。此邊雪景殊に住なり。

うぐひす橋

うぐひす橋は同町百十四番地先の石神井用水に架せし舊水雞橋をいふ。根岸の近傍圖の解説に云。水雞橋御隱殿敷地の東北角用水にかけし石橋をいひし由。近年石橋をかけたて。うぐひす橋と刻れり。往時は此邊用水の北は田にて。此邊並に御隱殿の池等に水雞最も多く棲みたりと云。

御隱殿跡

御隱殿跡は前記うぐひす橋以西の地なり。同解説に云。上野の

宮の隱居御殿なりき。古圖に御隱居所とのみ記したるもあり。寶曆三年七月杉崎の地四段一畝餘買上られ。造營成りて莊屋を極め。常に宮家の遊園なりき。五本松の下に茅門ありて。宮は裏傳ひに入らせられたりとぞ。殿内の繪は狩野河春美信にて。泉水中島朱欄の橋などあり。池中には金邊蓮を植。月夜などには舟を浮べられ。音楽などせさせ給ひし由なり。徳齋の記に此地の四時の景を叙して。月は御隱殿まへ臺の下松原邊。尤よし況や管絃の香山岳にひやく夜はまた仙界の趣ありとあり。戊辰義経隊の變に官軍より舊殿を燬拂ひて。跡は今皆民居となり用水に表門前なりし大石橋を存するのみ元祿圖には此西に火屋とあり火化場なりしならむ。

三島神社

三島神社は上根岸町四十二番地字元三島即ち東叡山の北麓に於て舊日本鐵道線に沿つて在り。本社は伊弉冉命、大山積命、和足彦命、上津姫命、下津姫命、三島姫命を祀る。淺草區壽町に在る三島神社の元地なるを以て本社を置く。彼社は寶永六年此處にありしなり。新編武藏風土記稿金杉村の條に「村内に淺草三島明神社四石餘あり。慶安二年附せらるる所なり。彼社寶永六年迄は小名根岸にありし故なり」と見ゆ。境内に入れば左に日露戰役從軍將卒記功之碑あり。明治三十九年四月建る所にして。大槻博士(文彦)の撰文を列す。鐵鎖以て之を欄し。内に十二吋砲彈二個を置く。露國一等戰艦艦「トトウササン」浮揚後調査の際揚彈筒中に在りしを發見せしものにて建設委員藤澤碩一郎氏の懇請に因り。海軍機關大佐横山正恭君より寄贈せしものに係る。

正面に石の鳥居ありて三島神社の扁額を掲ぐ。次に一双の石獅

次に兩基の常夜燈あり。明治三十年五月同町有志者の建る所。次に兩個の鐵製水盤を置く。同三十五年五月設くる所なり。

神社はしら木造りにて拜殿には扉なく三島神社の額を掛け。注連繩を繞らし鈴索を垂る社堂敷所に「千社札不可帖」との禁示札を附しあり。

要傳寺

要傳寺は上根岸町六番地に在り。法住山と號す。法華宗にして安房國小湊護生寺の末なり。開山は日嚴上人寛文八年二月寂とあれば其の以前の創立なるべし。

七言妙題化被萬國法旗風 十字鐵槍威服百魔神將靈 墓地入口に地藏堂あり。多くの墓東を掛く、墓域を點檢せしに。井上備前守秀果の墓には。清忠院殿法性冠山日勇居士弘化四丁未年三月十七日と題せり。又森川翁之墓には六十年如夢。今吾將歸元。看花且玩月。樂主寄。此魂の五絶を刻しありき。

庚申堂

庚申堂は上根岸町七十一番地の曲角に在り。小宇中に庚申塔を安置す。側面にも三個の同塔あり。寛文八天九月とあるもの此中にて古し。香火常に絶えず。此庚申あるが爲めに此邊を庚申塚と呼べり。

梅屋敷址

梅屋敷の地は同町百三十一番地なり。根岸及近傍圖の解説に云。天保十四年村民小泉富右衛門梅園を開き。弘化二年二月將軍世

子家定公鷹野の時御通り抜けとて。園中を一覽せられき。安政文久の際園廢せられぬ。嘉永元年の「初音の里鶯之記」の碑舊地に存せり。

### ●下谷中根岸町

◎位置及地勢

下谷中根岸町は全く根岸の中央に位し。東は金杉上町と下根岸町に對し。西北は上根岸町と北豊島郡に界し。南は坂本裏町と簗宮町とに隣り。地勢は素より低し。石神井川用水市郡の境界を成す。土地の區畫番號は一より百十三に至る。

◎町名の起原沿革

下谷中根岸町は根岸三町の内其の中央に在るを以て名く。其の起原沿革は上根岸町に記する所の如し。

◎景況

當町は根岸中最も幽靜の地なり。山茶花、寒竹の籬は今や見る能はざるも割竹の垣に衙門などの構ありて自ら優雅の趣を存せり。少年の教育場には二十九番地に市立根岸小學校（明治二十年の開設に係る）あり。華族には二十四番地に子爵石川成秀。畫家には三十一番地に中村不折。五十六番地に狩野良信。八十一番地に黒澤墨山。篆刻には七十九番地に小沼翠山。官吏には九十番地に志賀雷山（電話一〇四）實業家には十三番地に千葉鐵藏（電話五九四）三十番地に福原光（電話七四四）。六十九番地に山本義上（電話六〇二）七十二番地に三俣盛一（電話一九二）七十七番地に大川平三郎（電話八八二）の諸氏居住し。旅館には四番地に台東館九十番地に根岸館あり。飲食並に貸席に三十六番地に古能波奈園（嘗て本誌に記載せり）四十一番地に鶯春亭（昔の鶯春亭にあらず。今は金ふら料理なり）あり。その他西藏院の傍に料理業魚長あり。

十八公榮霜後露。一千年色雪中深。

常磐なる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり

八十八叟大澤超外書

### 御行松不動尊之碑

吾祖弘法大師曰。山藏玉草木茂。撮收劍光彩衝。東京根岸里有石像不動尊云。大師修行於此所。利有松乃所安像也。因稱御行松。申世廢頽。殿堂就荒。寶曆中有湯殿山僧快秀。依夢感得此像於松下土中。岡田利完者。造堂奉焉。爾來香煙至今云。所謂是松之茂由於有是像乎。銘曰。

純乎甘雨 普潤石田 良心不動 魔障那邊  
有信分影 救迷泛船 眞成威德 松操萬年  
明治十五歲次辛巳五月 少教正吉堀慈恭 撰

大講義成田照玄謹書

其の後根岸及近傍圖の解説を讀み。上野の宮御行の説益々信すべきを知れり。其の説に云、

御行の松假蓋巨松にして。西面の枝振最もよし。金杉村水帳に大松とありし由。これ本名ならむ。宮家の舊臣本間八郎翁云。上野の宮御加行とて百日間毎朝山内及根岸邊の神祠佛宇を徒歩にて廻らるゝことありて。此松の下に息はせらるゝを例としたり。土民因て御行の松と稱せりと。此説得たるが如し。小畑詩山（名行簡稱良卓）は上野の宮の侍讀たりし由にて。其御行の松の作に「後湖松假蓋懸梢。雨雪風霜老倍榮。一自王蒙御幸。畫香時存吹笙聲。拙調なれと勞證とす。空海文覺行法の説は取らず。

### ●石神井川用水

石神井川用水は根岸町の西北界に沿つて。流れ市郡の境界線を

### ●時雨の岡

時雨の岡とは俗間に中根岸不動堂のある邊をいふ。後世好事家の名づけしものなるべし因て不動堂を時雨岡不動と稱し。其の傍の松を時雨松と唱ふ。

### ●御行の松 一名時雨松

御行の松は。時雨岡不動堂の傍らに在り。故に一に時雨松と唱へ。又單に大松とも呼ぶ。高さ二丈餘。周圍三圍に餘れり今尙ほ繁茂して鬱蒼たり。時雨の松の名あるは。廻國雜記の歌に基くといふ。同書に云。淺草を立て新羽といへる所におもむき侍るとて。道すがら名所ともたつねけるなかに。忍の岡といへる所にて。松原のありけるかげにやすみて。

霜の後あらはれにけり時雨をは忍ひの岡の松もかひなし此歌に據り此地も忍か岡に連り。殊に此松は秀たれば。後世好事家の名けしものならむ。御行の松と稱する事に就ては定説なし。新編武藏風土記稿に「此松につきさま／＼の説あり。弘法大師此地にて大日不動の修法を行せりと。或は康平の頃源賴義治承の頃頼朝等の故事。及び文覺行を爲せし所とも云傳ふ」と見ゆ。然れども其の證なし。東京案内には其松は寛永中上野門主其下に行法の事ありしより一に御行の松とも呼ぶと明記せり。前説より稍く信ずべしと雖も。確證を擧げざれば未だ俄かに従ふを得ず。松下の碑に徴すれば。弘法大師修行の處とす。是れ素より傳説に據るものなり。二月八日實見せしに。松は大さ三圍ありて。大枝四方に垂下しみことなるものなり。注連繩を掛け。六本の支柱を添へあり。傍に二碑ありて一は和漢朗詠集の詩歌を刻し。一は其の由來を識せり。左の如し。

成せり。處々に「石神井川下水水塵芥捨べからず日暮里村役場」としてし制札を建。此用水は石神井川の水を王子村金輪寺の下にて。一丈七尺堰き來り。村内を東流せしめ、近傍數村の灌漑に供し。末流は隅田川に落せり。

### ●根岸養生院

根岸病院は申根岸町三十六番地に在り。耳鼻咽喉科の専門治療所にして。院長はドクトル、メヂチーネ菊池循一氏なり。

明治三十九年二月の設立にして病室十六を有す。入院料は特等四圓一等三圓二等二圓三等一圓五十錢とし。外に手術料を要す

### ●永稱寺

永稱寺は申根岸町二十二番地に在り。長久山と號す。眞宗にして本願寺の末なり。現住職は和久隆宏師。

本尊彌陀の立像は惠心僧都の作といふ。開基淨念は俗稱を和久勝之進といひ。寶治二年四月寂す。

表門に「説教毎月十一月二十一日午後二時」の標札を掲ぐ。門内南手に鐘樓あり。庭上に椎古木二株あり。

### ●千手院

千手院は同町十九番地に在り。補陀落山と號す。眞言宗にして大塚護國寺の末なり。開山は僧禪海にして。文祿四年に寂す。

門前に千手院の石碑を建。題して云。如來色無盡。智慧亦復然。一切法常住。是故我歸依。

門内南側に忍屋長春の俳句碑あり。立白も見へぬ野分のあした哉

### ●西藏院

弘法大師堂は土藏造りにて東面し。本堂は南面せり。

西藏院は中根岸町二十六番地に在り。圓明山と號し。法福寺と稱す。新義真言宗にして智山派なり。現住職は山本了典師。創立の年月詳かならず。天正十九年の上野郷水帳に其の名を記しあり。且つ近年土中より康安二年の文字ある板碑を發見したるよしなれば蓋し當地に於ける最古の寺院なるべし。

開山は法印平真にして中興は第二十世法印祐永なり。其の墓碑を檢せしに。平真の墓には年月を識さず。祐永には文政二卯年八月二十一日とあり。當寺はもと三島神社の別當にして。今は時雨岡不動堂並に釋迦堂を管理し居れり。

門はしら木造りにて。扉上に牡丹の透し彫あり。結構頗る優美なり。門前に八十八ヶ所第二番弘法大師としるしたる石標を建つ。又門には「御府内二十一ヶ所第十一番」の黒地金字札を貼す。本堂玄關は破風作りにて楣上に赤鬼を剛したり。玄關前に橋、松の二圃あり。二月八日實見の際には黃實累累として垂下せり。傍に弘法大師一千五十年遠忌供養塔あり。

墓域の入口の傍に地藏堂ありて石地藏を安置す。奉納云々西國四周阪東願主宗清と刻す。惜らくは年月を銘せず。墓域に入れば佐久間氏の碑あり。佐久間貞一君追悼碑舊友榎本武揚書と刻す。又ひしや家の墓あり。前に石燈籠二基を建つ各々雞を彫り一には「ねするなよ身のうきふしは世の中のときをしれとてうたふにはとり正房」一には「にはとりは親子や妻のむつまじくなさけもかかく義にもつよしな妻女まき」とあり

又鈴木咲花の墓には咲花鈴木先生墓とありて。諱元義字浩然。鈴木氏。俗稱主馬。生於東叡山下金杉之邑。因號山陰咲花翁。又號龍松園云々の銘文を刻す。文政四年辛巳九月關東陽の撰する所なり。

●圓光寺

圓光寺は中根岸町三十八番地に在り。寶鏡山と號す。臨濟宗にして京都妙心寺の末なり。現住は三木智誠師。草創は元祿十二年にして。開山を東峯といひ。開基を周足院月相一圓といふ。元祿四年七月寂すといへば。追福の爲めに建立せしものか。

當寺を世に藤寺といふ。もと大なる藤樹ありて花時遊觀者多かりしに因る。江戸砂子に云。當寺に名高き藤あり。柳二十七間英凡四尺餘。江戸名所圖會に云。根岸圓光寺世俗藤寺といふ。庭中架を繞らして是を纏はしむ。桑の長さ三四尺に充て花色最艶美なり。同書載る所の圖以て當時の景況を徵すべし。惜哉其の後火災に罹りて枯死したるよしにて今はなし。

鏡の松堂前に在り。現存のものは第二代なるべし。樹下に一尺許の小石祠を置く。弘化二乙巳二月初午當山七世拙觀造營之とあれば。稻荷祠にや。新編武藏風土記に云。鏡松古木なり。其幹直立し。根上四尺計上に圓鏡を偃たる如く一蓋をなして枝葉繁茂せり。日光御門主隨宜樂院准后當寺の山號に因りて。名つけ給ふ。其時賜へる歌に

幾千歳さかへし寺の鏡松曇らぬ空の影をうつして  
辨天社今見當らず。同書に神體長四寸弘法大師四十二歳厄除の爲に彫刻せし四十二體の一なりと相殿に觀音を安す。長一尺許舶來の像と云と見ゆ。

●時雨岡の不動堂

門はしら木造りにて寶鏡山の横額を掲ぐ。赤得水の書なり。墓地入口に天神眞楊梳柔術教正木義正先生の墓と題せし碑あり。墓地中央に市村累代之墓とある高墓上に觀音の像を置きたるは他に見ざる所なり。



松の行御



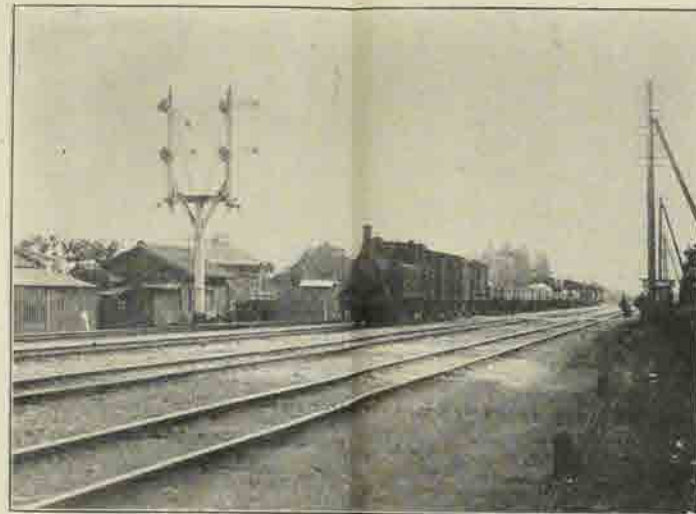
手土輪の三



通町上杉金



校學小常尋等高岸根



切踏道鐵下殿院御



(杉金在) 社神島三



園稚幼屬附上同



(岸根在) 社神島三



橋輪の三

(坪川辰雄撮影)

不動堂は中根岸町五十七番地御行の松の傍に在り。今の堂は新築のものにて。護堂者住せり。

前に不動堂の扁額(龍眼侍)を掲げ。鰐口を掛く。此には貞照の文字明かに見ゆれば。次記比丘尼の奉納せしものと知らる。新編武藏風土記稿に云。元來此所は福生院の舊地にて世代の墳墓今も此所にあり。先の年岡田安兵衛と云もの。先祖左衛門の襟掛。及文覺が作れる不動を石櫃に納め。此松のもとに埋め。上に石像の不動を置しが。其子孫安兵衛實曆中先祖の遺書等の入し一櫃を再び彼襟掛不動の入し石櫃の内に藏め。新に大像の石不動を建立し境内頗る景致をなせしに。故ありて廢却せられ石像のみ松根にありしを。文化三年貞照といへる比丘尼本願となり。公に乞奉り。不動堂を建立して松根の不動を遷して安すと云。

●西念寺

西念寺は中根岸町八十二番地に在り。東國山と號し。萬照院と稱す。創立は寛永七年にして。開山は誓譽的山和尚なり。本尊三尊彌陀は惠心僧都の作といふ。堂中に千葉筑前守の本尊たりし正觀音長一寸三分なるを安置す。此像は千葉家の庶流原兵左衛門と稱する者寄附せりとぞ。

目洗地藏寺中にあり。弘法大師の作と稱す。江戸百四十八所の一東方第六番なり。此像は的山の念誦佛にて。的山嘗て眼病を患ひし時地藏夢想の識法を得て眼を洗ひしに。忽ち平癒したりといふ。因て此名あり。其の法今に傳へて施藥と爲すよし。墓地に小野於通の墓あり。

●世尊寺

世尊寺は中根岸町八十八番地に在り。鐵砂山と號し。觀音院と稱す。眞言宗にて京都仁和寺の末なり。

當寺は應安五年豐島左近將監輝時の創立する所にして。開山は賢榮和尚とす。

門内北畔に一字あり。福智六地藏及び弘法大師の眞影を安置し智積院僧正隆業の書きし兩扁額を掲ぐ。地藏は一石に一像を連刻せしもの。背面に若人欲了知云々の破地獄之文を彫る。文久三年七月とあれば新らしきものなり。石陰に二體の石像あり面目を酒滅し。いかにも古きものと見ゆ。是が古の地藏尊にあらざるか。弘法大師は柳上に在り。庭上に赤松の見るべきあり。樹下に奥邨君之配高島氏之碑を置く。本堂は破風作りにて。鐵砂山の横額を掲ぐ。杉陽水の書なり。堂前に田中道榮居士の辭世を刻したる碑を建つ。いままでのおさもつとももつきはてい。うれしくかへるものとふるざと

●安樂寺

安樂寺は中根岸町百十二番地に在り。佛迎山と號し。往生院と稱す。淨土宗にして京都東山一心院の末なり。寛永四年正蓮社覺譽意的和尚之を坂本村即ち今の下谷坂本町に創建し。中興開山迎蓮社直翁和尚の時。元祿六年に此地に移轉せり。本尊は寶冠の阿彌陀如來なり。元の本尊は僧祐松在任の頃故ありて。相模國大磯の大運寺に譲れりと云。

寶物中縫涅像は長一丈三尺幅六尺四寸童子内親王(母は美福門院)の御親縫に係る。圓光大師畫像は梶井門跡の筆にて。共に知恩院尊光法親王關東御下向の時寄附ありし三十五品の内なりといふ。

●觀音堂

觀音堂 天明元年造る所。本尊聖觀音は三尺三寸の立像にて惠心僧都

の一刀三禮の作なり。もと京下加茂の本地佛なりしが。兵亂に際し民間に所持せしを故ありて。尊光親王感得せられ當寺に寄附せられしよし。

地藏堂

みかへり地藏と稱す。其の由來は當寺中興單舉元祿九年に記せし略縁起に載せたるよし。巴女の守本尊なりと云。墓地には書家野口幽谷翁の墓あり。

下谷下根岸町

位置及地勢

下谷下根岸町は當區の北端に在りて。東は金杉上町同下町に對し。西北は北豊島郡に界し。南は中根岸町に接せり。地勢は低し去年洪水の際は荒川の漲水此地を浸せり。石神井川用水西北に沿ひて流れ。市郡の境界を成す。土地の區畫番號は一より百〇六に至る。

町名の起原並沿革

下谷下根岸町は根岸三町の内にて下方。即ち宮城より遠かりたる處にあるを以て名く。其の起原並沿革は上根岸町の條に記したり。

景況

當町の背後は田園に接し居るを以て幽靜は中根岸町に譲らず。商家は稀なり。華族には九十八番地に子爵柳生俊郎の邸。別業には四十二番地に馬越別荘。百六番地に小林別荘あり。博士には九十八番地に下山順一郎。武人には五十七番地に戸塚派揚心流柔術道場第二練武館上野八十吉。會社員には六十番地に百相忠政(電話六九六)六十六番地に中井三之助(電話二四五六)の諸氏居住す。又二十二番地に那須與一氏あり。宗隆の後裔にや。其の他別項記する所の如し。

石稻荷神社

石稻荷神社は下根岸町二十二番地に在り。神體は石像なるを以て此名ありといふ。

社は瓦葺にて大ならず。奥宮は土藏造りにて。少しく離れて建てり。前に石の鳥居あり。右に水屋ありて丸石の漱水盤を置く。明治三十年二月設くる所なり。二月八日記者の至りし時は適々初午の日に値れるを以て祭事あり。幸に酒井抱一翁揮毫の大幟を見ることを得たり。書する所の如し。

文化十年歲次癸酉

正一位石稻荷大明神

金杉村大塚 抱一道人拜書

二月 初午

根岸病院

根岸病院は下根岸町五十一番地に在り。煉瓦塼を繞らし。背後は悉く田園なり。當院は精神病及腦病患者を治療する所にして。松村清吾氏此が長たり。

病室は百十一を有し。外に消毒所、談話室、遊戯室作業室等の設備あり。電話は下谷二二四四。

入院料は一日一等二圓五十錢、二等一圓五十錢、三等一圓、四等七十五錢とす。外來診察料は初診三圓次回よりは毎回一圓の規定にて。同診察時間午前九時より午後三時を限る。

大空庵

大空庵は下根岸町六十二番地に在り。根岸及近傍圖の解説に云ふ。大空庵眞言宗。方二十間許の小岡の上にあリ。文政圖にはこゝに「ピクテラ大塚イナリ」とあり。大塚といふ地名も此塚に起れるか。太田道灌の七塚の一かと云。(谷中本行寺の道灌物

見塚其の一なりと)雪中庵太塚の小高き處の尼寺中に寓せりと云は。こゝか。其時の句とて「端居して鶯に顔みしらせむ」禮帳やまづ鶯とかきをめむ

迎堂

釋迦堂は下根岸町二十八番地に在り。目下修繕中。風土記稿に三藏社とありて本地佛石像の釋迦を安すと註せしもの是なり。天保十年西藏院住僧の建る所なるよし。

雨華庵の跡

雨華庵と酒井抱一の居なり。下根岸町八十六番地に在り。見今は山本義上氏の邸宅と爲れり。根岸及近傍圖に。酒井抱一道人文化六年よりの舊居なりしに維新の三四年前に焼たりと見ゆ。かゝれば今の結構は舊制にてはなかるべし。

現在の當邸は衡門の内松あり斜めに敷石を踏みて玄關に至る正面中庭の入口に木戸を構へ。一個の石燈を置く。先づ人をして敬接せしむ。中庭及び堂室の雅美想ふべし。

市内通杖記に云。酒井抱一常に風流を事とし。詩歌俳諧書卷文章等を嗜み。下谷根岸に卜居して雨華庵と號したるは。世人の周知する所なるが。其の場所は今の下根岸八十六番地(諸星小學校の向)黒川某の邸宅にて。世上に現存せる揮毫物も多くは此處にて成りたるなりと。

扶桑畫人傳を按るに。抱一は酒井雅樂頭忠以の弟にして忠因といへり。多病なるを以て出家して西本願寺文如上人の養子と爲り。文詮眞眞と稱し。後東都に來り。根岸爲塚に住し。雨華庵當村又は輕舉道人庭柏子と號せり。性畫を好み。狩野高信に就きて畫法を學ぶ。壯年京師に登りし時。土佐守光貞の弟子となり。又圓山應瑞の門に入りて深く寫眞を研究せり。東都に在りては渡邊南岳を師とし。後尾形光琳の畫を慕ひ。妙手となれり。

り。其晩年の傑作は光琳、應舉に伯仲するが如しと云ふ。又谷文晁と交を結びて共に名あり。嘗て光琳百圖及び尾形流印譜を著して其の名を揚げたり。文政中六十八歳を以て死せり。

根岸は風雅の地なり

根岸は忍岡に連りて小流を帯び。田園に接し。紅塵到ること稀なるを以て。昔より風雅の文士は多く此地に間居せり。酒井抱一、龜田鵬齋の如き皆其の人なり。江戸名所圖會に。吳竹の根岸の里は上野の山蔭にして。幽趣あるが故にや。都下の遊人多くはこゝに隠棲すとありて。竹籬の中茅屋の下閑客楸枰に對するの圖を掲げたり。幽趣掬するに餘りあり。東京案内又記して云。根岸の里。東叡山の北麓にして風流文雅の士の幽棲多かりし處。

山吹をさし出しそうな垣根かな

根岸はうぐいすの名所

根岸は昔より柴鷓鴣の名所なりと稱せらる。已に鶯春亭などありて啼合會など行はれ。今に至りて其の實を失はざるは殊にゆかし。江戸砂子に云。根岸の里は鶯の名所なり。元祿の頃御門主より京都の鶯を多く放させたまふとなり。關東のうぐいすは此あり。此所は上方の卵ゆあなまりなしといへり。

江戸名所圖會に云。花になく鶯水にすむ蛙ともこの地に産するもの其聲ひとあしありて。世に賞愛せられはへり。根岸及近傍圖に云。元祿の頃上野の宮公辨法親王關東の鶯には詠ありと思はれ。上方より數百羽の雛を下し。根岸に放させ給ひしよしにて。此地なるはだみてきてえずとぞ。それより鶯の名所となり。初首の里の名さへ起れり。鶯は此地所在の竹叢に巢をかく。他所なるは脚黒きにこゝの産なるは脚灰色に赤みありて。その道の人は識別すと云。鶯會昔は年々向島講地に開き

一 茶

しに。弘化四年六月根岸の梅屋敷に移してより。今に絶えず。毎年四月四方より飼鳥を持寄りて笹の雪邊軒並に人家を借りて美麗なる籠に入れ置き。人々立寄り々々聞きて其の聲を評し。優劣を判し。一等なるを准の一と稱す。

●根岸の名物

根岸の三木 文政の圖に根岸の三木とて。二股榎、カイボウの榎、御行松をあげたり。根岸及近傍圖に。二股榎西念寺前にあり。元と東側なる垣にありしが。路をひろげて今は路中に立てり。上は一幹にて下は又を成せる大木なり。根の土を崩されて露根となりしものと云ふあり。記者西念寺に至りしも氣付ざりし。今はなきにや。カイボウの榎は一に天狗の榎ともいひ。今上根岸諏訪家邸内に其の大根株を存せるよし。御行の松は獨り其の操を變せざるは喜ぶべし

根岸の三鳥 同圖に「ウクヒス」「タカモリヒバリ」「ツル」をあげたり。然るに鐵道の響高く人家も増したれば三鳥共に殆ど其の跡を絶ちたりと云。但しウクヒスは或は稀に來り啼くことありとぞ。鶴は徳川氏の頃。三河島路の沼に蒔餌して飼つけ置き鶴御成とて將軍親ら此に臨み。鷹を放ちて之を捕へ。京都に獻せらるゝを例とせり。今は鶴も雲雀も其の影を見ず。

水雞 是も根岸の名物なりしよし。今は見えず。但三十三年頃は大概文彦の園池などに稀に來り。夜間汽車の響に合せて叩くことありしとぞ。今はいかにや。  
山茶花 抱一の句に「山茶花や根岸はあなじ垣つゞき」又さやん花や根岸たづぬる草ふばこ」と見えて。此地の産は根岸紅と稱し。別種なりしよしにて中輪の紅色殊にすぐれたり。今此山茶花の垣は見當らず。  
根岸土 壁塗に用う。今より五十餘年前平六といへるもの發見

せしよし。此邊所在の地中に層を成す。即ち赤茶色の砂土なり。江川某搗きふるひて專賣すと云。  
高年青 上根岸町六十二番地に培養家舎營業場あり。今の主人を篠常五郎といふ。日本園藝會事務所の札を掲ぐ。四世の祖吉五郎魚商なりしが。此草を培養してより今に其の業を繼げり故に肴舎と稱す。根岸松といへる種を海内の絶品とす。明治十年全國の高年青競進會を此家に開きしより。例年十月開會す。數千圓に價するものありと云。

養山椒 同町十九番地このみ庵藤澤氏にて之を販く。静岡縣なる朝倉山椒の子に限る。絶品の醬油を以て久しく賣るを秘傳とす。故に永く貯へて愈々佳味なり。又青紫蘇の葉を精製し粉末と爲したるを嚙く。是れ亦久しく香色を變せざるより諸人の賞玩する所となり居れり。  
此他名物には芋阪下の羽二重團子、笹の雪の豆腐、生薑、漬菜葱の各種あれども郡部に屬するを以てこゝに擧げず。

●文政年間根岸に居住せし著名なる人物

文政三年庚辰孟春刻の根岸圖に載せたるもの左の如し。  
抱一 酒井抱一にて別項にしるす詩繪師原羊遊齋も隣地に居住せしよし。  
其一 酒井抱一の居雨華庵の前なり。抱一の侍臣にて且つ門人と云。  
鵬齋 龜田鵬齋なり。石稻荷の先にて今の下根岸町五十七番地とす。  
北尾 鵬齋の北隣にて浮世繪師北尾重政なり。  
烏山 畫家なり。御行松の前北通り

玉芍 烏山の西鄰。ヒナザイグとあれば離人形の製作家なるべし。

藤松齋一伊 石稻荷の東。花とあれば挿花師なるべし。  
太田桂舟 藤松齋の南鄰。キンザイグとあり金細工にや  
烏山 鈴木其一の前。  
今田 庚申塚の手前。今の鶯春亭の前  
菅沼 今田の西隣  
吉田 庚申塚の北

●古奥州街道

古奥州街道は根岸并に三輪に涉りてあり。根岸及近傍國の解説に。文政三年の月崖といふもの、作りし根岸圖に。中根岸の二股榎の路に「古オウシウミチ」とあり。古若も此樹は奥州路の左手にありしものと傳ふ。又天保九年の原徳齋の記に。上根岸の西上野山の崖上の五本松に「里人の説往古奥州海道道木の松とて。又金杉新屋敷内に古木の「一樹あり。其下に古き地蔵あり同じく奥州海道の跡と云傳ふ」とあり。此古地蔵といふは。今の中根岸の新屋敷の舊構内安樂寺の表門の向ひの邊にありて。小野於通に縁ある佛と傳へしを、維新後に同地の西念寺に移して。今身代地蔵といふ是なり。又根岸のさるや横丁土手通りの北角にて地蔵ありて南面し。これも奥州路の端にありしものと傳へ。(近年同地の大空庵に移せり)又千住路三の輪通り西側藥王寺境内に今も後向地蔵とてあるは。西に奥州路ありてそれに面してありしものなれば。背面せるなりと傳へ。(像に正徳四年の字あり。後世の改作ならむ)又嘯月といふもの、舊き繪に。

●上野町二丁目

●位置及地勢  
上野町東は仲徒町三丁目四丁目に連り。西は廣小路町と其の界を交へ。南は同町に臨み。北は下谷町一丁目に對せり。地勢は素より高からず。而して電車線路一丁目の中央を東西に横斷し。忍川は二丁目の北を流過す。土地の區劃二丁目は一番地より二十二番地に至る其の中七番地を缺きたり。二丁目は一番地より二十九番地に至る。

●町名の起原并沿革  
上野町はもと下谷村の内にして。上野即ち忍岡の西邊にありしが幕府寛永寺を建るの際其の域内に屬するを以て今の地に屬し市肆を開設し。上野町の名稱を附せしものなり。延寶年間に及び。分ちて二町と爲したり。

●里俗の名

里俗一丁目の西を肴店と稱し。二丁目の東横町を摩利支天横町同北を三枚橋横町と呼べり。

●景況

當町は舊來の市街にして廣小路に接するを以て。殊に繁昌せり一丁目一番地には有名なるいとう松蔭屋(伊藤治郎左衛門電話特一三二一)の呉服店ありて前に活人形を飾りて美服を觀せり

十四番地には兩替店石川傳次郎。十七番地に呉服店川越屋（阿部孝助電話二二三）十八番地に興讓社十九番地に第二生司院あり。又六番地角には雲丹一手捌の大和屋あり。二丁目には七番地に太物商大橋治左衛門。（電話五二四〇）八番地に名代かきもち。九番地にそばや稲毛屋。十番地に魚勝。十五番地に圓松軒といへる茶道挿花の師あり。而して二丁目には古着商多し。

●一 乘院

一乘院は上野町一丁目十番地に在り。藥王山と號す。新義真言宗に智山派に屬し。芝區愛宕町一丁目眞福寺の末なり。寛永五年佐々木某の創立にして祐照和尚此が開山たり。大聖歡喜天の銀製立像、弘法大師興教大師の木製坐像を安置せり。

●德大寺

德大寺は上野町二丁目二十一番地に在り。妙宣山と號す。日蓮宗にして下總國中法華經寺の末なり。開山日遺上人にて承應二年寂とあれば其の以前の創立なるべし。摩利支天堂あり。聖德太子の作と稱する開運摩利支天像を安置せり。摩利支天堂は土藏造りにて擁護院の額を掲ぐ。參詣者多く。下足番人控居れり。本堂には鏡口を吊し。傍に一尺許の地藏尊を置く。洗滌の餘光澤あり。

編輯主任 山下重民  
圖書擔任 山本松谷  
寫真擔任 坪川辰雄

稟告

東京名所圖會は、風俗畫報増刊として、弘布するものたるも、全部完成するに至りては、一部の書籍として、座右に備へられむことを期せり、故に毎冊其號を逐ひ、編纂上極めて精確を旨とし、普く諸史並に古文書等に徴し、又は老翁及び其地の舊住者は質して、地理の沿革を考へ、名所古蹟を顯揚し、併せて目下の現況を詳記するの主意なるを以て、其要領を得むが爲めには、記者畫工を伴ふて、實歴精査し、或は照會して質問する所あるべし、されば此際苟も材料ともなるべきものは、努めて御送附ありて、便宜を興へられむことを請ふ

編輯部

御愛顧に酬ひ御意に叶ふ様常に諸事改良を怠らず大勉強罷在候間四時御遊覽又は神佛御參詣等の御歸途は何卒御光來の程奉願上候尙ほ御大連様御宴會は充分御便宜を圖り可申上候間陸續御用向仰付被下度奉懇願候 敬白

御料理温泉

上野公園新坂下

電話 二五〇八番  
下谷



●玉突等御遊戯場の設けあり



**銅牌** 佛領河内博覽會  
**銅牌** 東京勸業協會  
**金牌** 凱旋紀念五二共進會  
**壹等賞牌** 東京勸業博覽會  
**宮内省** 御賞上の光榮を賜ふ

**受領**

**堺段通敷物**  
 右段通敷物ハ綴方模様等最新ニシテ實用ニ適シ染色ハ吟味仕向寸法ハ何レノ間ニテモ御注文ニ應ジ製織可仕候  
**日高織敷物**  
 右日高織ハ綴方模様ニ製織ノ物ニテ堅牢保存ハ比類ナク四季共御使用上御座候段通敷物日高織ハ總テ洗濯色上ノ等御請合可申候  
 前記敷物定價御座方ハ御申上シ次第進呈可仕候  
 諸敷物問屋 東京日本橋區新上町河岸 日高屋商店  
 (特電 電話 浪花四七七一番)

尾形月耕著

**東京名勝畫譜**

全一冊 木版彩色刷  
 英文圖解附  
 正價金貳圓  
 郵税金八錢

畫伯尾形月耕先生の筆力勁健にして趣向警拔なるは世の知る所なり、本書收むる處(一)宮城の廣嚴(二)馬場先門(三)半藏門(四)日比谷大神宮(五)日本橋(六)芝公園辨天の池(七)江戸見坂(八)星ヶ岡日枝神社(九)芝浦(十)大川より月島を望む(十一)深川公園(十二)洲崎(十三)向島弘福寺(十四)十二社(十五)廣尾(十六)洗足池(十七)多摩川九子の淵(十八)中川等なり斯道に學ぶの輩は勿論好畫の士は須臾も離す可からざる珍本なり

丕象庵小關金山著

**人生命名心法**

全壹冊 正價金六十錢  
 郵税金六錢

本書は姓名を以て人の吉凶を判斷するの原理を説明したるものにして人生の生理より説き音聲の原理に及び天地の原理に考へて姓名を判斷する占筮の法を簡明に説明したるものにして家庭命名には必要缺く可からざるものなり

東京市神田區新通石

**發行所 東陽堂**



**清心丹**

定價  
 千二百粒箱入 金壹圓  
 五百粒箱入 金五十錢  
 二百粒箱入 金二十錢  
 九十五粒入 金十錢  
 四十五粒入 金五錢  
 ニツケル罐入 金三錢

**高木與兵衛製**

東京市日本橋區元大阪町八番地  
**第一心思鬱憂** ○胸腹の痛を去り ○痰咳 ○留飲 ○船車魚肉酒の酔  
**頭痛** ○暈眩立ぐらみ或は ○中暑 ○中寒 ○嘔吐 ○腹下痢 ○人若  
 毎食後に服用すれば食物停滯 ○食傷等の患ひなく殊に精神爽快  
 にして活潑ならしむる故に百事意の如くならざることなし又平  
 常學事 ○執筆 ○簿記 ○座談業等にして過度なる勞働し自から運  
 動不足なる時は胃の消化機能衰 弱することあり此清心丹は是  
 を防ぐに最も適當なり平素持薬として連服すれば必ず生溼胃  
 弱 症の疾苦をしらすして天壽を保べし又流行病の際には時  
 々服用すれば水中の蟲毒を除き本毒防ぐ故に旅行乗船の時携  
 帶して急病を救ふ一助とす由て諸君之號で懷中要薬と呼稱す

近頃いろくまざらわしきもの夥多之あり候に  
 付此人魚の商標と東京高木を能く御見とめの上  
 御求めの程奉願候  
 本剤は各府縣藥舖及賣藥店に於て販賣せり

**新撰畫鑑**

第二編(三)全二冊  
 價金 八圓  
 送料 小豆八圓

官内省博物館御編製  
 (畫紙紙經打大形石版摺)  
 右ハ御物ヲ初メ各種族貴顯及諸大家ノ珍藏ニシテ容易ニ世人ノ觀望シ難キ名畫數百種ヲ蒐集セシモノニテ遠クハ阿佐太子藤原經隆ノ遺蹟ヨリ土佐狩野家歴代ノ名蹟近クハ天明文化時代ニ至ルモノ支那ニアリテハ唐王摩詰ヨリ宋元明清ノ大家寫眞遺蹟種種畫等ハ勿論近世沈南隱等ニ至リ迄ノ遺蹟中最モ有名ナル者ヲ精擇セラレタレバ諸家考古其他奇々モ精畫ニ心アルモノ坐右必備ノ珍本ナリ鑒キニ就テ官内省ヨリ印刷複製ノ命ヲ受ケシニヨリ殊更精練ナル職工ヲ撰ミ之ヲ寫寫石版ニ摺圖シタレバ一日其真ヲ見ルト異ル處ナシ

**難福圖卷物**

全三卷 價金 五圓  
 送料 小豆四圓

此卷物ハ有名ナル三井寺ニ珍寶シテ秘藏セラル、處ノ故開山應雲ガ多  
 年丹精ヲ凝シテ描ミタル七難七福ノ圖ヲ繪畫獨得ノ妙技ヲ以テ石版印刷  
 ニシタルモノニシテ他ニ比類ナキ至珍ノ繪卷物ナリ

**發行所 東陽堂**

東京市神田區通新石三番地  
 口座番號振替 一一九〇六番

# 東陽堂發賣地圖目錄

農商務省地質調查所御編製

近畿信濃津尾御編製  
**大日本鐵道線路圖** 全二部  
 定價 一圓七十五錢 送郵六錢

東陽堂發賣  
 圖書目錄郵

人江英君實撰  
**大日本臺灣地圖** 折本全二部  
 定價 二圓二十五錢 送郵二錢

分百萬 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 一圓

和文 金一圓 折本 定價 七十五錢 送郵 六錢

分百萬 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 一圓

和文 金一圓 折本 定價 七十五錢 送郵 六錢

分百萬 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 一圓

和文 金一圓 折本 定價 七十五錢 送郵 六錢

分百萬 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 一圓

和文 金一圓 折本 定價 七十五錢 送郵 六錢

分百萬 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 一圓

和文 金一圓 折本 定價 七十五錢 送郵 六錢

分百萬 大日本帝國地質全圖 十五部 定價 一圓

和文 金一圓 折本 定價 七十五錢 送郵 六錢

北海道地質調查所  
**北海道地形圖** 全一折  
 定價 一圓八十錢 郵稅六錢

券二錢御送  
 附次第呈上

日本之部全八卷 定價 八圓重稅二錢  
**學習用白地圖**  
 外國之部全九卷 定價 九圓重稅二錢

## 帝國貯蓄銀行

銀座一丁目河岸通  
 飯倉支店 神樂坂支店  
 赤坂支店 須田町支店  
 四谷支店 米澤町支店  
 本郷支店 吾妻橋支店  
 品川支店 坂本町代理店  
 横濱支店 小樽代理店  
 一錢以上何程でも御預り最も御便利に取扱ふ  
 毎月五日迄の御預金には全月分の利子を付す

### 風俗畫報賣所

京橋區尾張町	東海堂	日本橋區尾張町	至誠堂
神田區表神保町	東京堂	大塚區梅田町	盛文館
日本橋區吳服町	會社北隆館	京都府寺町三條南	會社芸神堂
京橋區錦屋町	良明堂	京都府佛光寺通烏丸東	三共社
麻布區永坂町	旭堂	入京	
本郷區元宮土町	春堂	高知市種崎町	澤本齋吉
神田區神保町	上田屋書店	名古屋市中	淺見文昌堂
本郷區元宮土町	田中書店	信濃國上諏訪町	宮坂書店
本郷區新通町	北光社	鹿兒島市仲町	吉田幸兵衛
墨田區長岡四丁目	北光社	羽後國阿曾町	東林書店
墨田區新通町	北光社	下總國水海道	新々堂

### 發行所

東京市神田區通新石町三番地  
**東陽堂支店**  
 (電話本局 九七〇番)  
 (郵便振替貯金日總算當座九〇六番)

著作權  
 發行所  
 日(一) 吾妻健三郎  
 編輯人 橋本繁  
 同 市小石川區宮下町三十九番地

料告廣	意注	表價定
●同数の多少により一切御別注	●本誌は都て別金にて御注文の外送本せず○御注文の前金御切れ 版印は送本を停止す○本誌代價爲に御注文の御返金は御返金支局 へ振込まること○御注文にて御注文の御返金は御返金支局へ御注文 べし○御注文代用は一期増にて五厘一錢の切手に限る	冊数 定價 郵税 合計
一冊		金十五錢 金一錢 金十六錢
二冊		金三十一錢 金二錢 金三十三錢
三冊		金四十七錢 金三錢 金五十錢
四冊		金六十三錢 金四錢 金六十七錢
五冊		金七十九錢 金五錢 金八十四錢
六冊		金九十五錢 金六錢 金一百零一元
七冊		金一百一十一錢 金七錢 金一百一十八錢
八冊		金一百二十七錢 金八錢 金一百三十五錢
九冊		金一百四十三錢 金九錢 金一百五十二錢
十冊		金一百五十九錢 金十錢 金一百六十九錢
十一冊		金一百七十五錢 金十一錢 金一百八十六錢
十二冊		金一百九十一錢 金十二錢 金二百零三元
十三冊		金二百零七錢 金十三錢 金二百二十元
十四冊		金二百二十三錢 金十四錢 金二百三十七元
十五冊		金二百三十九錢 金十五錢 金二百五十四元
十六冊		金二百五十五錢 金十六錢 金二百七十一元
十七冊		金二百七十一錢 金十七錢 金二百八十八元
十八冊		金二百八十七錢 金十八錢 金三百零五元
十九冊		金三百零三錢 金十九錢 金三百二十二元
二十冊		金三百一十九錢 金二十錢 金三百三十六元

明治二十二年三月一日第一號發行  
 明治四十一年二月廿五日第三百八十號發行